GK21
E13
77W22073
事故本
ページ破損
本文 P.1~2
'93.4.21

SELF HEL

BY SAMUEL SMI

TRANSLATED

BY K. NAKAMU

正改 西國立志編

中村正直譯述

原名自助論

東京

博文館藏版

SELF HELP

BY SAMUEL SMILES

TRANSLATED

BY K. NAKAMURA.

改正 西國立志編

文學博士中村正直譯述

原名自助論

東京 博文館藏版

GK21
E13

文學博士中村正直先生肖像

國立國會
52.6.13
圖書館藏書

77W22073

Professor Nakamura
with H. W. Fields's
kind regards.

戊辰四月余去倫敦時
弗理蘭德(フリーランド)君以此書原
本見贈巻首題此三行
乃其手書也今模寫付
刻俾子孫永莫忘其所
自云　中邨正直識

中村敬宇先生自敍千字文

天保壬辰。月建二丙午一。井六平旦。生二于江戸一。
幼名釧太。祖妣攸レ命。後改二正直一。中村爲レ姓。
父母鞠養。哺乳諄誨。猫犬李梅。忠孝仁義。
如レ斯等字。次第認記。非是夙慧。濡染所レ致。
髫齔挾レ策。論孟學庸。登レ樹捕レ蟬。披レ草求レ蛩。
棗栗勸奬。汪濊恩深。每二念到一レ此。涕涙霑レ襟。
燈下針簫。霰雪夜嚴。談二話故事一。內寓二良箴一。
鼓舞誘掖。賴二茲妙法一。叱咤靡レ聞。鞭笞奚及。

彊圍協洽。入二井部塾一。惑二溺小說一。水滸成レ癖。
就二桂甫周一。竊習二蘭籍一。師輒覺察。隨加二呵責一。
迨二十七齡一。寄二宿茗讌一。侗庵捐レ館。一齋主レ盟。
官給二薪米一。書壓二棟楹一。春誦夏絃。伐木嚶鳴。
吐二露肝膽一。親似二弟兄一。講二究渾噩一。互務二提醒一。
旁嗜二文章一。蘇潮韓海。興意相會。拍レ案呼レ快。
廬陵歐九。愛二其情至一。紆徐曲折。磅礴浩氣。
亦喜二震川一。簡古醇厚。尤重二餘姚一。具二三不朽一。
眼高手低。邈矣鵠的。欲レ從二末レ由。瞻望憤激。

癸丑乙科。濫竽合レ式。僥倖拔擢。皐比秉レ鐸。
地占二爽塏一。聖林翠綠。慈闈健康。庭院肅穆。
宕陰息軒。薰陶受レ益。門有二嘉客一。趨迎倒レ屐。
佳時令節。交觴迭酌。好吟二杜詩一。愈於絲竹。
禍福循環。治亂反復。蕃舶競臻。率土驚愕。
恬熙已久。賢俊鬱抑。廟議翻覆。僉懷二怵惕一。
藤森吞レ寃。吉田死レ獄。烈公幽囚。耕雲窘逐。
亥歲秋冬。扈二駕京洛一。擬レ聚二侯伯一。君臣輯睦。
豈圖世局。弗レ可二收束一。以啓二鼎革一。皇猷恢廓。

象山鉅儒。識量超卓。旅亭訪尋。綴燭更僕。
惜哉被刺。斃乎道側。踵吾蒙譏。殆罹災厄。
攘夷喧騰。扼腕怒目。或緣衷赤。多出計畧。
乃倡開港。明白磊落。曷怪衆怨。輻輳攢簇。
萱堂見背。將軍薨逝。垢面蓬髮。憂愁隱蔽。
忽思壯遊。馳觀域外。吸噓沆瀣。蠲滌濁穢。
應慶二載。凌跨大洋。遂抵龍動。術藝之場。
伴侶秀邁。麒麟鳳凰。兼葭倚玉。鬢毛帶霜。
朝課暮繹。較短角長。錐股懸梁。何暇憶鄉。

初謂島徼。眇蕞越裳。詎料規模。宏闊盛昌。
虔奉眞神。振整紀綱。德善慫恿。姦惡隄防。
鰥寡孤獨。盲啞癲狂。救恤醫療。條例審詳。
厥民活潑。峻偉雄剛。忍耐黽勉。鷙悍奮揚。
格物探賾。抉摘祕藏。崇尚實驗。分析毫芒。
倍根碩匠。尸祝擲香。牛董引力。自暗發光。
豪傑挺起。斬闢鴻荒。各誇創造。孰甘襲常。
樓閣麗。崔嵬嶙峋。街市洞達。貨財充塡。
綺羅駢闐。車馬殷轔。若夫富强。宇宙誰倫。

烏兎迅速。再踰二暑寒。一
蒼黄趣レ裝。過二佛郎西。一
祇恨期迫。叵二暫留稽。一
歸舟安穩。團圞酒杯。
回二顧既往。一領レ異攬レ奇。
乾坤寧謐。胥仰二宸威。一
農樵爭レ席。鷗鳥無レ猜。
王室維新。方急用レ材。
我也東旋。城北擇レ栖。
桑梓戰作。鴈魚寂然。
風俗奢侈。金帳寶釵。
美景勝蹟。空付二渺迷。一
歡極而泣。征途忘レ疲。
鯨濤鼇浪。屢犯二險危。一
遷二住靜岡。一種レ菜灌レ畦。
芙蓉當レ牖。著述掩レ扉。
朋友聯翩。翱二翔瑤池。一
設二同人社。一教二育英才。一

遠近來集。謬得二虛譽。一
承二乏攝理。一誓竭二駑駘。一
制度稍備。辟雍轉移。
嗟爾兒輩。謹聽二訓言。一
寬弘誠敬。恭謙粹溫。
沈湎淫佚。貪二樂瞬間。一
咀二嚼華葩。一爛二熟典墳。一
持レ志須レ堅。攻レ業要レ專。
縹緗萬卷。心血存焉。
女子範校。俯瞰二茶溪。一
幸免二罪戾。一寔憑二僚儕。一
五品敍レ爵。未報二涓埃。一
勇猛進修。勿レ憚二艱難。一
懲レ忿窒レ慾。止レ妬克レ慳。
招レ殃惹レ咎。貽二悔窮年。一
莫レ沿二支流。一宜レ溯二淵源。一
博綜廣採。禁レ黨戒レ偏。
百家縱橫。經史紛綸。

願與汝曹。勤讀終身。

序

歷觀古今來立一事業之人。皆抱百折不回之概。把持牢。立志確。勇往直前。一切不問世間毀譽褒貶。亦且不以一敗挫其銳氣。然後所期望之事始成。是豈尋常發憤所能屆耶。故凡百術藝。以至人之爲聖爲賢。其成否全存于本身。更不干別人事。所謂豪傑之士。雖無文王猶興者。乃是也。頃者。友人中邨敬宇。出所譯述自助論。予受而讀之。編中歷舉西國辛苦立一事業之俊傑。予抵掌曰。彼邦亦有此說乎。至裒之成書則妙。士大夫立身骨子。實在此處。此處捉住不失。後來所植立。必

有卓然可見者。自助之爲言。殊與子輿氏不動心之旨合。皷舞年少人。孰如此。敬宇著眼極好。予老矣。莫能爲。所望尤在後生也。感慨之餘。遂題簡端。庚午秋仲下浣。

沙蟲翁古賀增題

余譯是書。客有過而問者。曰。子何不譯兵書。余曰。子謂西國之强由于兵乎。是大不然。夫西國之强。由于人民篤信天道。由于人民有自主之權。由于政寬法公。拿破崙論戰曰。德行之力。十倍于身體之力。斯邁爾斯曰。國之强弱。關于人民之品行。又曰。眞實良善。爲品行之本。蓋國者。人衆相合之稱。故人人品行正。則風俗美。風俗美。則一國協和。合成一體。强何足言。若國人品行未正。風俗未美。而徒汲汲乎兵事之是講。其不陷而爲好鬬嗜殺之俗者幾希。尚何治

安之可レ望哉。且由二天理一而論。則欲レ強之一念。大悖二於正一矣。何者。強者對レ弱之稱也。天生二斯民一。欲下人人同受二安樂一上。同修二道德一。同崇二知識一。同勉二藝業一。豈欲二此強而彼弱一。此優而彼劣一哉。故地球萬國。當以二學問文藝一相交。利用厚生之道。互相資益。彼此安康。共受二福祉一。如レ此。則何有乎較二強弱一競二優劣一哉。夫人知二天命之可レ畏。以二眞實之心一行二良善之事一。一人如レ此。一家如レ此。一國如レ此。天下如レ此。愛日仁風。四海合レ驩。慈雲和氣。六合呈レ祥。如レ此。則亦何有乎甲兵銃砲之用一哉。古不レ云乎。兵者凶器。戰者危事也。仁者無レ敵。善戰者服二上刑一。一人之命。重二於全地球一。匹夫之善行。有下關二係於邦國天下一者上。乃以二貪二土地一之故一。使至二貴至重之人命一。橫罹二極慘極毒之禍一。其違二皇天之意一。負二造化之恩一。罪不レ可レ逭矣。西國近時。大省二刑罰一。然猶未レ能レ全戢二干戈一。豈其教化有レ未レ洽者耶。抑宇宙泰運之期未レ至耶。嗚呼。六合之際。禮教盛而兵刑廢。當レ有レ日也。恨余與レ子未レ及レ見レ之也已。客唯唯而退。遂書以弁二卷首一。歲次上章敦牂。孟夏上浣。中村正直識。

天地のはじめ、潮の沫の凝りて成れる國こ、多なりけむを、荒潮の八鹽路たちへだて、遠き境のことはしも、古き御史どもにもしるされず、そのくにぐの人ら、まゐ来しことも聞えず、大かた唐土天竺わたりを遠きかぎりとし、そが餘なるをば、なべて陸奥の蝦夷の千島のひとしなみになん思へりけらし、そも〳〵西洋人の御國に渡りこしことは、今より三百年餘むかしぞ初めなるべきを、いくほどもなくてとぶめられ、ひとり阿蘭陀の國人のみ、肥の國のかたほとりに来りて物易ふるわざをばゆるされにたり、されど、ことふ人しも多からず、まいて

あだし國この有さまなど、聞も傳へざりしを、その天の下にありとある國この事ども、かつぐ〳〵も物にしるし傳へられしは、新井君美のぬしなん始めなりける、其後くさぐ〳〵の書ども、やう〳〵數そひにたれど、大かたの世の人は、心とむべきものとしも思ひたらずなむ、あまたのとしをばへにける、かくて近き十年あまりこのかた、外國人多くまうでき、御國人はたかなたにも往かふ道ひらけしより、今はるけき異國ぶりも、よろづおぼろけならず成きつる物から、猶えみしとだにいへば、ひたふるに大は小をかね、強は弱をしのぎて、獸のくひあふが如きものとのみ、おもへ

る人しもぞ多かめる、こゝに中村大人のものせられし自助論といへる書を見るに、何某の大人のいひけむ、今のえみしは古へのえみしにあらずとの言の葉もしるく、げに其說すべて和漢のかしこき人こにもおとらず、あはれあだし國人にも、かばかり誠實なる心のあれば有けるよと、打なげかるゝまで、めづらしともめづらしきふみになん有ける、いでや此書世に行はれて、こを讀みむ人こゝ、其道こにつきて、おのがじゝ健く雄こゝしき志をたて、事にあたりてたゆまずくづほれず、萬の事業一つの眞心もて、なしおほすべき日本魂、ふるひおこさむたよりともなりなましかば、大

人のいたつきむなしからず、いみじき世のをしへぐさともなりなまし、おほよそ天地の間に人とあらんかぎり、たとひ國をへだて境をことにし、打見るすがたうち聞く詞は、さまゞゝなりとも、ひとしくみな産靈の神の御靈によりて、生れつるものにしあれば、おのづから直く正しき眞の道は、一すぢならで有べしやは、そを思はで、わたくしの心せばく、あらぬ小みちに迷ひなんは、あぢきなきわざなりかし、されば掛まくもかしこき天津神の大御こころのまに〳〵、天の壁立かぎり、谷蟇のさわたる極み、天の下四方の國人睦み親しみ、船腹乾さず、柁機干さず、渡りまうできつゝ、

物多(モノサハ)に滿ち足らはせる大御國も、いよ〳〵ます〳〵榮え行(ユカ)なんものぞと、おのが心に思ふことを、大人にきこえしかば、さらばそのよしいかさまにも書(カキ)しるして、此書のはしに添へよといはるゝが、いなみがたくて、拙き言の葉、くだ〴〵しくかいつけたるになむ、時は明治三(ミ)とせといふとしの長月(ナガツキ)ばかり、三田葆光、

自助論第一版序

スマイルス自助論序

この書を著す所以の原由は、如何(イカ)にといふに、去(サン)ぬる十五年前の事なりし、北方の村落(井ナカ)に於て、有志の者、數輩相會(ツド)ひ、夜中講談を聽かんとて、我を招き請ひし事あり、その詳は、次に敍するが如し、〇極めて卑賤なる少年二三人、或(アル)年の冬の夜、相會し、互ひにその知るところを語り合ひ、學問を交易して、知識を開き、進益を得ばやと思ひ立ちたり、始めて會合せし場所は、その結びし社中の一人の貧しき住家なりしが、幾程(イクホド)もなく、其外に、又同志の者加はり、その場所忽ち席を入るゝに足らぬことゝなりたり、既にして、夏日炎暑の天となりしかば、同社の朋輩、この家の外なる廣庭に集まり、その朋輩は、園中にある小亭を圍(カコ)み、露に暴(サラ)されて座を占め、敎師となれるもの

は、その小亭に在りて、算題などを出して、夜中の教課を授けたり、天色清朗なる夜は、更深るまで、かくして業を勤めしが、或時は、一陣の驟雨俄かに降り灑ぎ、石版に書したる數目を洗ひ去り、已むを得ず、その夜は散會して、各〻不興に思ひしことも間ありけり、冬天の時候近づき來たれば、いかにして庭中に寒夜を過ごすべき、且朋輩次第に增して、尋常の民家にては、其人數を容る能はざれば、何にもこれを庇蔭する居所を求めざるべからざることとなれり、この朋輩、孰れも貧しき少年にして、一週七日に、甚だ些少なる工錢を得ることなれども、一屋を賃し借らんと思ひ立ち、此よ彼よと、尋ねたれば、遂に一の汚穢なる大屋を看出したり、この大屋は、コレラ〔霍亂〕流行せし時、これを病院に用ひしものなれば、なほ瘟疫その中に藏れりと思ひ、人々これを嫌ひ避くるものから、この地の主も、誰やらん知るべからず、

然れども、この朋輩の少年、これ等を恐れず、相議し、一週七日に幾程といへる賃錢にて、この大屋を借り、椅子及び書机を安置し、冬課を始めしが、この場所、忽ち夜學紛繁にして、而も快樂なる景象を顯はすこととなる、この教課は、甚だ粗陋にして完全ならざれども、堅志定力を以て爲したり、されば、朋輩中、少しく知る者は、己より知らざるものを教へ、自から修め善くする間に、他人を修め善くし、總べてその爲すところの事、一箇の勉作する儀範を立てたり、かくして、この少年相互ひに、讀書作文、算術地學を、或は教へ、或は學び、中には、數理化學、及び諸國の言語を教學するに至れり、同志の少年、大約百人に滿ちしかば、その志願、益々大いになり、教師を招き、講談を聽かんと企つる折しも、我〔斯邁爾斯〕この事を聞くに與かれり、同志者中の人、我が家に來り、我が講說を爲して彼等に與へんことを請ひ、

今まで爲ししこと、この後爲さんと欲することどもを、備さに述ぶるその言辭、極めて謙遜なり、せめて我に紋引の小話にても、說き給へかしといふにぞ、我も彼等の自助くる精神あるに感動せられ、縞かに思ふには、通俗の言語を以て、講說することは、我の所長に非ず、されど些少の言語にても、勤勉の意、忠直の意、眞實の意より發して、講說を與へなば、後來に至り、或はこれより善果を結ぶことも、あるべければ、未だ必ずしも裨益なくばあらずと、因りてその請ひを許せり、我この精神を以て屢自ら成就したりし諸人の遺範を講說し、人各々大小に限らず、自己に賴りて、萬事を做すべきことを語り聞かせ、及び後來の福祉安寧を望まば、各自一箇の人、たゞ自己にのみ依賴すべし、詳かにこれを言へば、自己の勤勉なる自修の力、及び自己の定むる規法、及び自ら撿束する行事に依賴すべし、就中その最要なるものは、人たるもの、各々その職分を盡すに、正直誠實なるべし、これ實に男子品行の尊榮なるものなりと、これ等の事を諸人の例を引いて、指示したりき、この敎訓は、所羅門古へ以色列の賢王の箴言バイブルノ中のプロバルブス、と全く同じくして、少しも新らしきことなく、又別に造り出したるものなし、我が敎誨、舊に仍るに過ぎずと雖も、甚だこの少年に悅ばれ、接受せられたり、さて、この少年、各各堅志勉力を以て、その生涯の道路を行き、大人となるに及び、各々種々の方向に進みしかば、この輩、多くは、有用の職事に任ずる人となりたり、この敎訓を爲ししより以來、數年を經、その事、忘れたるが如くなりしに、或夜忽ち一人の客、鑄鐵場の工場より、新たに來るものと覺しきもの、訪ひ來り我に語つて、某は今工人を使ひ、富饒なる人となれり、抑も昔年、先生懇に我が輩を敎誨し玉ひし事を憶ひ出し、感恩の情に堪へず、某生涯の路を行き

利運を得たるは、實に先生の訓導の力に賴れり、先生の吾が輩を勸勉激勵し
玉ひし精神に負(ソム)くまじと、常々志ざし、遂(ツヒ)に利達を致したりと言(イ)へるを聞き
しことのありにき、

自助論原序

此書は、既に英國幷びに他國に博く行はるゝものを再校するものなり、亞米利加(リカ)に數種の版ありて印行し、和蘭(オランダ)、法蘭西(フランス)、日耳曼(ジエルマン)、領墨(デンマーク)の人、各々その邦語を以て譯せり」、この書は、前人の行狀を載せたれば、讀者必ず前人の勞苦を經、試驗を積み、難事に耐へて、大業を成就するを觀て、奮發の意を生ずべきなり、

此書、既にセルフ ヘルプ〔自ら助く(ミヅカラ)〕と名づけて、世に行はれたれば、今又改むることを爲さず、然れども、一言を述べて、讀者の誤解を防がざるを得ず何如(イカ)にとなれば、もし人たゞ表題に由りて、セルフイシネス〔自ら私(ミヅカワタクシ)する意〕と混淆し、自ら私(ワタクシ)する事を讃美するの書なり、と思ふときは、作者の

意と、正に相背反(アヒハイハン)することなり、」蓋し作者、主として少年の人に、自ら勤(ミヅカ)めて當然の志業を做し、勤勞を惜まず、辛苦を厭はず、淡薄を以て自ら奉じ、或は清廉の節を守ると譯す遂にその志業を成就し、自己の功勞に倚仗して斯の世に自立し、偏に他人の扶助恩顧に倚賴すべからざることを勸めんが爲に、この書を作ると雖も、然れども、亦文人(リテラレイ)、學士(サインチフイックメン)、工藝(アーチスト)の人、新術新器(インヴエントルス)を發明する人、敎育(エヂユケートルス)を掌る人、仁慈(フアイランスロピスト)の事を行ふ人、傳道(ミツシヨナリース)のために遠方に行旅する人、傳道(マアテイルス)の爲に身を殺して仁を爲す人、此等の人の遺(ノコ)せる標準典型に由て觀るときは、その自(ミヅカ)ら助くるの職分を盡すの中に、他人を助くるの意は、自ら包含(オ)すること明かなり、

或は難じて、この書自ら助くるの力によりて益を得たる人のみを多く擧げて、その敗れを取りたる者に及ばず、と言ふものあり、之に對へて曰く、たゞ敗れを取りたるのみの事は、言ふに足らず、然れども、次の書卷を讀むときは、失敗の事は、眞正(ホンタウ)の勉强する人の爲に、極善の敎訓となることを知るべし、蓋し試み爲すの事、幾回(イクタビ)となく敗るれば、その回(タビ)ごとに、益々奮發して、精力自(オノヅカ)ら生じ、自ら己(オノ)れを治めて、知識益々長ずることを得べきなり、之に由りて觀るときは、失敗の事は、「苟も能く堅忍耐久(シンボウヅヨキ)の心を以て、これに勝ちたらんには、」利益となり敎訓となる事なり、故に我れかくの如き例を多く擧げて、この事を明にするを務めたり、

人或は功なくして敗るるものあり、然れども、善事を企(クハダ)てて成らざる者は、善人たることを失はず、故に敗るると雖も貴ぶべし、不善の事を爲して、一時或は成就するとも、たゞに汚名を流すのみ、故に人の事を爲すは、善惡如何と問ふを要す、その跡の成敗のみを觀るべからず、然りといへども、善事

を志して成就したらんは、失敗したるには遙かに勝（マサ）るべし、凡そ事の成就するは、人の定志あり、勉力あり、忍耐あり、勇氣あることの結果效驗なり、古人曰く、

人は、成敗得失を使令し、己れの意に從はしむるの權なし、然れども、勉強して已まざれば、天賞として、成就の賜（タマモノ）を受くべし、

この書を作る主意は、約してこれを言へば、昔より言ひ傳（ツタ）ふる善教を、少年の人に申戒せんと企（クハダ）てたるものなり、曰く、「少年の時、勞苦せば、暮年は安樂を享くべし、」曰く、「天下の事、勤勉學習せずして能く成就するものは、決してこれなし、」曰く、「學者爲し難きの事に逢ふと雖も、その志を折（クヂ）くべからず、忍耐恒久の心を以てこれに勝つべし、」就中最要の教に曰く、「人たるもの（トリワケ）は、その品行を高尚にすべし、然らざれば、才能ありと雖も、觀るに足ら

ず、世間の利運を得るとも貴ぶに足ることなし、」我れこれ等の教を、世の少年に曉（サト）さんと志し、この書を作れり、もしこれに由りて、發奮勉強の人生じ來らざれば、我が著書は功無くして敗れたりと云ふべきのみ、

論曰、國所以有自主之權者、由于人民有自主之權、人民所以有自主之權者、由于其有自主之志行、今夫三二十家之民相團、則曰村、數村相聯、則曰縣、數縣相會、則曰郡、數郡相合、則曰國、故如曰某村風俗純實、則某村人民之言行純實者爲之也、曰某縣多出貨物、則某縣人民之力農勤工者爲之也、曰某郡藝文蔚興、則某郡人民之嗜學講藝者爲之也、曰某國福祚昌盛、則某國人民之志行端良、克合天心者爲之也、蓋總稱曰國、分言曰民、始無二致也、試揭輿地圖而觀之、自主之國幾何、半主之國幾何、羈屬之國幾何、如印度古爲自主之國、今則盡統於英矣、安南古爲自主之國、今則半屬於法矣、如南洋中諸國、今莫不爲西國之屬者、人或祇謂、西國有英主良輔、故勢威加遠方、殊不知、西國之民、勤勉忍耐、有自主之志行、不受暴君汚吏之羈制、故邦國景象、駸駸日上、蓋有不期然而然者、且不獨此也、西國之君、大用其智、則其國大亂、小用其智、則其國小亂、載在史冊、歷歷可徵、方今西國之君、不得以己意輒出一令、不得以己命輒囚一繫一人、財賦之數、由民定之、軍國大事、非民人公許、不得舉行、蓋西國之君、譬則御者也、民人、譬則乘車者也、其當向何方而發、當由何路而進、固乘車者之意也、御者不過從其意施控御之術耳、故君主之權者、非其私有也、闔國民人之權、萃於其身者、是已、唯然、故君主之所令者、國人之所欲行也、君主之所禁者、國人之所不欲行也、君民一體、上下同情、朝野共好、公私無別、國之所以昌盛者、其不由此歟、余尚記、童子時、聞清英交兵、屢大捷、其國有女王、曰維多利亞、則驚曰、眇乎島徼、出女豪傑乃爾、堂々滿清、反無一箇是、男兒耶、後讀海國圖志、有曰、英俗貪而悍、尚奢嗜酒、惟技藝靈巧、

當時謂爲信然、及前年遊於英都留二載、徐察其政俗、有以知其不然、今女王不過尋常老婦、舍飽弄孫耳、而百姓議會、權最重、諸侯議會、亞之、其被掄於衆、爲民委官者、必學明行修之人也、有敬天愛人之心者也、有克己愼獨之工夫者也、多更世故長於艱難之人也、而權詐猥薄之徒不與焉、慢神欺心之人不與焉、酒色貨利之徒不與焉、喜功生事之人不與焉、其俗則事上帝、尊禮拜、尙持經、好賙濟貧病者、國中所設、仁善之規法、不遑殫述、姑擧其一、貧家子女所往學之學院、通計三二千有餘所、學徒八萬人、凡此係民人公同捐銀而設者、官府不與焉、凡百之事、官府之所爲、十居其一、人民之所爲、十居其九、然而其所謂官府者、亦唯爲民人之利便而設之會所耳、如貪權勢擅威刑之事毋有也、抑以通國之廣、人民之多、豈不無姦宄不法之徒乎、然審其大體、則稱曰政敎風俗擅美西方、可也、而魏氏之書、徒稱其貪悍尙奢嗜酒、是蓋見西國無賴之徒、居東洋者、而概言之耳、何其謬哉、余又近讀西國古今儁傑之傳記、觀其皆有自主自立之志、有艱難辛苦之行、原於敬天愛人之誠意、以能立濟世利民之大業、益有以知彼土文敎昌明、名揚四海者、實由于其國人勤勉忍耐之力、而其君主不得而與也、嘗聞善馬有駕車者、不加鞭策、而自能行、不待控御、而自能馳、及御者妄引繮繩多加撻責、而其馬扞格牴牾、頓致不能行、嗚呼、坤輿之內、何國不善、何民不良、由于御者之喜功滋事、而致不遂其性、不能存其天良者、蓋亦多哉、

改正 西國立志編 原名 自助論 目錄

第一編 邦國及び人民の自ら助くることを論ず……一

（一）自ら助くるの精神……一
（二）人民は法度の本……二
（三）國政は人民の光の返照なり……四
（四）邦國の盛衰……五
（五）シーザリズムの一派と自助の説と反對なることを論ず……七
（六）維廉・大亘自立の事を論ず……八
（七）貴賤に限らず、勉強忍耐の人、世に功ある事……九
（八）英人自ら助くるの精神ある事……一〇

（九）實事習驗の學問……一一
（十）言行錄の人に益ある事……一三
（十一）大人豪傑は貴賤貧富に拘らざる事……一三
（十二）舌克斯畢の事……一四
（十三）貧賤より出でたる豪傑の人……一六
（十四）有名なる天學者……一九
（十五）クレヂーメン　牧師と譯す、の子より名を顯はす人……二〇
（十六）アツトルネース　法官なり　狀師の卑き者　等、その他、卑賤の人の子にて名を顯はす人……二一
（十七）卑賤より起りて大名を得たる外國人の事……二二
（十八）製煉家卯格林の事……二三
（十九）法國に於て、歩卒より登用せられし人……二五
（二十）伯浴沙敦の事、〇以下四章、專心強力に由りて、卑賤より高位顯職に至りし人を擧ぐ……二七
（二十一）福克斯、林德西の事……二八
（二十二）維廉・若克孫の事……三〇
（二十三）力査・格伯田の事……三一
（二十四）勤勉に非ざれば、百事、工妙に至る能はざる事……三二
（二十五）富貴の人また自助の力を要す……三三
（二十六）富貴に生れて征陣の苦を甘んずる人……三四
（二十七）富貴に生れて有名の學士となれる人……三五
（二十八）名門右族に生れて政學文章に長ずる人　附羅伯・比爾……三六
（二十九）勞爾德爵名伯路寒……三七
（三十）律敦の事……三九
（三十一）垤士禮立の事……四〇
（三十二）窩圖窩士の論幷びに多克未爾の事……四一

（三十三）多克未爾、他人より助けを得たることを招認する事……四三
（三十四）人は自己の身を以て第一の幇手となすべし……四四

第二編　新機器を發明創造する人を論ず……五一

（一）英國の人民、職事に勉強する事……五一
（二）勞苦の工場は「學校の最も善きもの」と稱すべし……五二
（三）休・彌爾列爾、工事練習の益を論ず……五三
（四）英國の富強は、至貧至賤の人の力に賴る……五四
（五）機器創造者の、邦國を利する事……五五
（六）蒸氣機器の創造の事……五六
（七）惹迷士・瓦德の勤勉、幷びに心思を用ひて習慣となれる事……五七
（八）瓦德、蒸氣機器を作る事……五八
（九）蒸氣機器、百般の用となる事……六〇
（十）力査・阿克來幷びに紡棉機……六〇
（十一）比爾幷びに印花機を白布の上に花草を印する機器……六七
（十二）維廉・李幷びに織襪機……七一
（十三）戎・喜斯可的幷びに織ニ線帶一機……七二
（十四）若瓜德幷びに織機……八〇
（十五）亥爾滿幷びに梳治衣料一機……八七

第三編　陶工三大家、即ち巴律西、薄査、宊地烏德……九一

（一）福楞察の人拉加、その業を勉むる事……九一
（二）培那德・巴律西……九二
（三）薄査の事……一〇〇
（四）若社・宊地烏德……一〇五

第四編　勤勉して心を用ふること、及び恒久に耐へて業を作すことを論ず……一一三

（一）大功業は、平常なる工夫に由りて得らるべし……一一三
（二）福運は勤勉の人に隨ふ、幷びに英才の說……一一四
（三）牛董、客不列爾、自らその學問を爲せし工夫を語る……一一五
（四）人の天性、甚だ相遠からず……一一六
（五）蜂窠の喩、幷びに光陰を黃金に化するの論……一一七
（六）熟復の益、幷びに比爾語記を習ふ事……一一八
（七）小伎と雖も、亦忍耐の工夫を要す……一一九
（八）事業を成すことの祕訣、幷びに桑葉の喩……一二〇
（九）快樂の心、一日も無かるべからず……一二〇
（十）望みは品行の本、幷びに加禮……一二二
（十一）學士雍の格言、幷びにその故事……一二四
（十二）畧度棒の事……一二四
（十三）加來爾の事……一二五
（十四）士堤反孫、瓦德、久しきに耐へて倦まざる事……一二六
（十五）羅林孫、禮亞德の事……一二七
（十六）蒲豐、晏起の習ひを矯むる事……一二九
（十七）斯格的、文人にして俗務を蔑んぜざりし事……一三一
（十八）知識愈〻多ければ、愈〻學問の足らざるを覺ゆ……一三三
（十九）潤・伯律敦、市を閱し書を讀む事……一三四
（二十）老同、農圃全書を著す事……一三五
（二十一）撒母耳・德留、刁惡の性を改めて著作家となりし事……一三六
（二十二）休模、忍耐の力を以て政務に功勞ある事……一四〇

第五編　幇助、即ち機會を論ず、幷びに藝業を勉修すること

（一）大功效は、偶然撞著して得るものに非ず……一四七
（二）大人は小事を藐忽せず……一四八
（三）牛董及び雍の發明は、偶然と稱しがたし……一四九
（四）觀察に聰慧なるを智者と稱すべし……一五〇
（五）加利列窩、搖錘を創造せし事……一五一
（六）伯拉溫、鐵懸橋を造り及び伯路涅爾、爹迷士河底の地道を造りし事……一五二
（七）哥倫布、海藻の浮べるを視て、新世界の近きことを知りし事……一五三
（八）小事の力……一五四
（九）富蘭克林及び嘎喇法尼、電氣の理を査出せし事……一五五
（十）吳士德、蒸氣の力あるを悟りし事……一五六
（十一）機會を擊著し機會を造る說……一五七
（十二）有名の工人、粗陋なる器具を用ひたりし事……一五八
（十三）李、偶然の事より、學に志せし事……一六〇
（十四）斯東の名言……一六〇
（十五）斯格的、何事を爲すにも、機會を看出せし事……一六一
（十六）普理斯的禮、年四十、始めて化學に志せし事……一六二
（十七）大未、手に隨ふ物を器具として、經驗を做せし事……一六二
（十八）發拉第、偶然の事より、化學に志せし事……一六三
（十九）大未の記簿に書き載せたりし語……一六四
（二十）古未耶、偶然の事より、本草學を勉むる事……一六五
（二十一）瓦德、士堤反孫、達爾東、機會を失はずして業を勉むる事……一六六
（二十二）零碎の光陰、集まりて極大の價値となる事……一六七

（二十三）名士、零碎の光陰を集めて、大業を成したる例を擧ぐ……一六八
（二十四）光陰の貴ぶべき事……一六九
（二十五）古人、著述の業に勞苦せし事……一七〇
（二十六）筆錄及び鈔寫の益……一七一
（二十七）潤・翰達、鈔錄を勤めし事、及びその他勉強の事……一七二
（二十八）翰達、物の定まりたる情形を忽にせずして、これを熟察せし事……一七三
（二十九）巴禮の事……一七四
（三十）厚倍、血の運行を發明せし事……一七七
（三十一）日納爾、牛痘を發明せし事……一七八
（三十二）白爾、神經の事を研究する事……一八一
（三十三）荷爾、神經病の、その根を肢體より發するものを發明する事……一八二
（三十四）黑爾舌、新行星を始めて看出だす事……一八三
（三十五）維廉・斯密士、察地學に長ずる事……一八五
（三十六）休・彌爾列爾、觀察の才ある事……一八九

第六編　藝業を勉修する人を論ず……一九三

（一）天才ありと雖も、必ず勉強の力を要す……一九三
（二）藝を好むものは、利の爲にするに非ず……一九四
（三）安日洛、淸廉淡薄にして、雕像學を勉むる事……一九五
（四）秩襄、一畫に七八年を費す事……一九六
（五）少年の聲譽は恃むに足らず……一九七
（六）伴克斯、小童を勸勵せし事……一九八
（七）古勞德・羅倫、萬象を以て師となせし事……一九九
（八）篤兒涅爾、薄値の畫を輕んぜざる事……二〇〇
（九）百爾理爾、瞽者の相と爲りて、羅馬に遊ぶ……二〇一

（十）加洛の事……二〇二
（十一）尼格拉士・保申の事……二〇四
（十二）潤・弗吉士面の事……二〇六
（十三）維爾啓、談話を好まざる事……二一三
（十四）畫工馬爾珍、大畫を作る時、屢〻餓死に迫る事……二一五
（十五）惹迷斯・沙不爾士、鑄鐵工にて畫工雕工を兼ぬる事……二一六
（十六）有名の樂師、彊勉にして倦まざる事……二二二

第七編　貴爵の家を創めたる人を論ず……二二五
（一）古は尊貴の族、今は多く平民に混ずる事……二二五
（二）現存する貴爵の家、多く商賈より起りし事……二二六
（三）力查・福禮、釘を造ることの祕を探らんと欲し、艱難を冒せし事……二二八

（四）維廉・費布士、沈船の貨財を捜り出だす事……二三一
（五）戰功に由りて貴爵を得たる人……二三五
（六）狀師よりして、貴爵に陞る事……二三六

第八編　剛毅を論ず……二三九
（一）人の品性は、小事の中に著し、○鎚を揮ふの力……二三九
（二）剛毅の心志……二四〇
（三）人、夙に事業に志を立つべし……二四二
（四）一時に一事……二四三
（五）勇猛の工夫……二四四
（六）心志の力、附ムーリスの大將……二四四
（七）志願するところのものは必ず得べし……二四五
（八）志意は自己にて主張すべき事……二四六

（九）拉面奈の書……二四七
（十）勃古斯敦、子を戒むる書……二四八
（十一）心志あれば必ず便宜あり……二四九
（十二）拿破崙の好んで誦する格言……二五〇
（十三）宕林登、職分の字を常に心に存する事……二五一
（十四）果決神速の貴ぶべき事……二五二
（十五）拿破崙、瞬息の機を窺ひ、敗を轉じて功と爲せし事……二五三
（十六）哈斯丁士、七歳の時、田産を恢復せんと志せし事……二五四
（十七）那比爾、印度に於て奇勳を策する事……二五五
（十八）那比爾、三軍に信服せられし事……二五六
（十九）那比爾、印度のヂヨッグラーを試むる事……二五七
（二十）印度叛亂の事、幷びに英人節に死する事……二五八
（二十一）雜未耶、東洋に航する事……二六一
（二十二）戎・維廉士、南海に航する事……二六四
（二十三）律賓斯敦、亞弗利加に至る事……二六六
（二十四）戎・厚亞德、獄制を改革する事……二六八
（二十五）若那士・翰囘、善法を創め邦人を惠む事……二六九
（二十六）額蘭未爾・沙伯、黑奴賣買のことを禁止する事……二七三
（二十七）勃古斯敦の讀書法、幷びにその名言……二八一

第九編　職事を務むる人を論ず

（一）事務の境界、狹小ならず……二八七
（二）職業の貴賤は、人品の高下に關らず……二八八
（三）職事を務め、兼ねて文學に名を得たる人……二八九
（四）現今生存する人の例を擧ぐ……二九一
（五）三物の論、幷びに勞苦より生ずる快樂……二九一

（六）墨爾畔の書……二九二
（七）瑣小の本錢……二九三
（八）工匠の美談……二九四
（九）勞苦なければ希望なし……二九五
（十）事の失敗、必ずその由あり……二九五
（十一）妄りに不幸と稱する世人の愚惑、幷びに潤孫の名言……二九六
（十二）話聖東、意爾平、吠狗の喩……二九七
（十三）五箇の性能、幷びに小事の忽にすべからざる事……二九八
（十四）精細の切要なる事……二九九
（十五）福格斯、瑣事と雖も、精細に心を用ひし事……三〇〇
（十六）順便の方法……三〇一
（十七）法國一相臣の話……三〇二
（十八）懶惰なる鄕紳の話……三〇三

（十九）斯格的、敏速の益を論ずる書……三〇四
（二十）光陰は產業なり……三〇四
（二十一）四半時の光陰……三〇五
（二十二）定期を愆らざるの德……三〇六
（二十三）事務を辨理する人に非ざれば、三軍の將となりがたし……三〇八
（二十四）拿破崙、軍中に在り、細務を辨理せし事……三〇九
（二十五）拿破崙の文書……三一〇
（二十六）宅林登、詳密に事務を辨理せし事……三一二
（二十七）宅林登、正直にして借財を懼るゝ事……三一八
（二十八）端正信實の貴ぶべき事……三一九
（二十九）商賈の端正信實なるべき事……三二一
（三十）正經ならざるの利は、受用すること能はず……三二二
（三十一）品行は一種の財寶なり……三二三

（三十二）大闢・罷克禮の事……三二四

第十編　金錢の當然の用、及びその妄用を論ず……三二七

（一）金錢を用ふるは、當然の道に從ふべき事……三二七
（二）自ら私欲に克ち、儉約を守るべき事……三二九
（三）格伯田、二種の人品あるの論……三三一
（四）工人、儉節を勉め、品行を高うすべき事……三三二
（五）三箇偶然の事……三三三
（六）節儉は家事を治むる精神……三三五
（七）節儉は保護の用……三三五
（八）節儉は端正老實の本質……三三六
（九）小利を競ふは小費を除くにしかず、○儉約にして仁惠を行ふべき事……三三七

（十）金を借ることの危き事……三三八
（十一）乞林登、話聖東、借債を懼れし事……三四〇
（十二）熱非斯、早年貧苦と戰ひし事……三四一
（十三）時俗、體面を飾るの弊……三四二
（十四）那比爾、軍官の負債を戒むる事……三四三
（十五）誘惑に抵抗すべき事……三四五
（十六）休・彌爾列爾、酒を止むる事……三四六
（十七）高處に眼を著け、惡習を改むべき事……三四八
（十八）富を致すことの諺語、幷びに所羅門の金言……三四八
（十九）高尚なる志望を以て勤儉を行ふべし……三五〇
（二十）托馬士・來的、罪人を惠みし事……三五一
（二十一）正經の職業は、卑賤と雖も、羞愧すべからざる事……三五二
（二十二）守錢虜の賤しむべき事……三五三

（二十三）儉吝の辨……三五五
（二十四）富人に德行の價あらざる事……三五五
（二十五）貪婪にして身を亡ぼすの喩……三五六
（二十六）人の事業は貧富に拘らず、並びに伯洛沙敦の事……三五七
（二十七）眞正の體面……三五八
（二十八）眞正の貴重せらるゝ人……三六〇

第十一編　自ら修むる事を論ず、並びに難易を論ず……三六五

（一）自ら教育すべき事……三六五
（二）惡瑙爾德の說……三六七
（三）身體を勞動するの益……三六八
（四）惹列迷・爹洛爾、勞動の益を論ず……三六九
（五）工事勞作の益……三七〇

（六）身體の强壯は、職事を爲すに益ある事……三七一
（七）有名の學士文人、少き時、勞力の遊戲を做せし例……三七二
（八）勞苦は百事に勝つ……三七三
（九）方向を善くして、學業を勉强すべき事……三七四
（十）容易は困難より生ず……三七四
（十一）精密の工夫及び透徹の理會……三七五
（十二）目的を立て定めて、書を讀むべき事……三七六
（十三）自己を信ずる事は、眞正の謙退と同一なる事……三七八
（十四）勞苦を經ざる學問の益なき事……三七九
（十五）勞苦を慣ふべし、安息を求むべからず……三八〇
（十六）學問は、善良の心、端正の行と、一體となるべし……三八二
（十七）學問と知識との大逕庭ある事……三八四
（十八）讀書のみを學問と思ふべからざる事……三八五

（十九）我れなるもの有らざるべからず、爲すところ有らざるべからず……三八七
（二十）自ら恭敬すべき事……三八八
（二十一）必荅臥拉斯の法語、及び彌爾敦の說……三八九
（二十二）自ら修むる事は、地位に關らざる事……三九〇
（二十三）卑下なる自脩の說……三九二
（二十四）稗官小說の害……三九三
（二十五）少年の人、歡樂に恥るべからざる事……三九五
（二十六）公斯當的、弱志薄行の事……三九七
（二十七）韓爾理、目盲し身病むと雖も、學を勉むる事……三九八
（二十八）尼格爾の事……四〇〇
（二十九）艱難は最善の教師……四〇一
（三十）知識は失敗より學ぶ……四〇二
（三十一）名將、屢〻敗績するに由りて、益〻兵法に進む事……四〇四
（三十二）貧苦禍難は、人の善師なる事……四〇五
（三十三）艱難の學校……四〇七
（三十四）辯論家格禮及び加蘭の事……四一〇
（三十五）貧苦に耐えて學習を勉めし人、馬來、摸爾、韋罷士……四一二
（三十六）維廉・格白的の事……四一四
（三十七）法國人の英國に住するもの、石匠より學師となりし事……四一六
（三十八）學師李の事……四一八
（三十九）有名の人、晩年より學問せし例を擧ぐ……四二〇
（四十）少き時の敏鈍を以て、將來を卜し難し……四二一
（四十一）大人豪傑、幼時に愚鈍なりし例を擧ぐ……四二二
（四十二）亞瑙爾德、童子の優劣ある所以を論ず……四二五
（四十三）父母、その兒子の夙達を望むべからざる事……四二六

第十二編　儀範　又典型といふを論ず……四二九

（一）家裡の敎化、最も緊要なる事、幷びに家國同一なる事……四二九
（二）父母の儀範……四三二
（三）物斯的、勃古斯敦等、その母に感化せられし事……四三三
（四）人の言行、將來と必ず相關る事……四三五
（五）人の言行、永く死せざる事……四三六
（六）拔倍籍、言行不レ死の論文……四三七
（七）極めて卑賤なる人の言行、亦風俗に關係す……四三八
（八）實行の人を化すること、空言の比すべきに非ず……四四〇
（九）邦治、鞋を補ひながらに、脩金なき貧兒を敎へし事……四四二
（十）朋友を擇ぶべき事……四四四
（十一）觀感の益……四四六

（十二）畫家、樂工、己れに優るものを慕ふ事……四四七
（十三）勇將の表樣……四四八
（十四）言行錄を讀むよりして、感發奮興せし人の例を擧ぐ……四四九
（十五）富蘭克林、德留、達德禮……四五二
（十六）亞爾費立、雷閼拉、路惕、烏爾弗、加禮……四五二
（十七）花納爾、進修の益を得たりし書を評論す……四五三
（十八）樂只君子の儀表……四五四
（十九）學士亞瑙爾德の德行、他人を感化せし事……四五五
（二十）潤・辛克禮の事……四五七

第十三編　品行を論ず、即ち眞正の君子を論ず……四六三

（一）品行は人の有てる最貴なる物……四六三
（二）加寧、拉說爾の嘉言、花納爾の善行……四六五

（三）富蘭克林（フランクリン）、孟典（モンテイン）の事……四六七
（四）品行は勢力なり……四六八
（五）勞爾德亞斯金（ロルドエルスキン）の行規……四六九
（六）人皆な品行を修め善くする事を以て、目的と爲すべし……四七〇
（七）美名の價……四七一
（八）信實は品行の骨子……四七二
（九）言行一致、內外間てなかるべき事、幷びに沙伯（シャーフ）の好める格言……四七三
（十）眞實の品行……四七四
（十一）習慣は第二の天性……四七五
（十二）習慣は始めを愼むべし……四七七
（十三）人は幼年より善き習慣に長ぜしむべき事……四七八
（十四）福祥、また習慣に由りて得らるべし……四七九
（十五）他人を待するに、溫和にして禮あるべき事……四八一
（十六）羅伯遜（ロベルトソン）の書牘……四八二
（十七）中心の忠愛、外貌の禮儀……四八三
（十八）容貌辭氣の修め善くすべき事……四八四
（十九）他人の異論を斟酌すべき事、魑魅（ちみ）の喩……四八六
（二十）眞實の心腸……四八七
（二十一）哥蘭的（グラント）兄弟、家を興せし事……四八九
（二十二）哥蘭的兄弟、舊怨を念はずして、恩惠を施せし事……四九〇
（二十三）ジエントルメン〔君子〕の義……四九二
（二十四）ジエントルメン〔君子〕は、自ら尊敬し、他人を尊敬す……四九三
（二十五）眞正のジエントルメン〔君子〕は、賄賂を受けざる事、宅林登（ウエリントン）、十萬金（まんぽんど）十萬兩餘の賄賂を卻けし事……四九四
（二十六）我が邦の三馬貴斯爵（マークイス）名宅勒斯力（ウエルレスリイ）、十萬金の贈遺を受けざりし事……四九六
（二十七）查爾斯（チャールス）・那比爾（ナピール）、印度（インヂヤ）に在りて、その君長より一切贈遺を受

けざりし事……四九七
（二十八）身外の富貴は、眞正君子の德と相關らず……四九七
（二十九）至暖の人、往々眞正君子の精神ある事……四九八
（三十）舟子の、性命を輕んじ、他人を救ひし事……四九九
（三十一）澳士地利の帝、貧民コレラ〔霍亂〕にて死せし者の葬を送られし事……五〇一
（三十二）英國の工人、巴里に在りて、貧人の棺車を送りし事……五〇二
（三十三）君子は、信實を以て第一と爲すべき事……五〇二
（三十四）剛勇の人は、柔軟の心、寬恕の行ある事……五〇三
（三十五）英雄俠烈の行、今世に至り、益〻盛んなる事……五〇五
（三十六）兵卒の温柔なる事……五〇六
（三十七）英國の船、亞弗利加海岸にて沈みし時、船中の人、從容和靜なりし事……五〇七
（三十八）君子は、己れより弱きものを凌虐せず……五〇八
（三十九）君子は、人に恩惠を施せども、德色なし……五一〇
（四十）君子は、己れを棄てゝ、人に讓る事……五一一
（四十一）德勒克の品行……五一二

通計十三編　三百二十四章

改正 西國立志編 原名自助論 目錄 終

閲

改正

西國立志編

原名 自助論

英國 斯邁爾斯 著

日本 中村正直 譯

彌爾、英國當今政學名家、文化三年生、歿士禮立

つゞき

（三）人民は法度の本

士農工商を統て人民といふ、農のみにあらず、下これに倣へ

邦國にて立つるところの法度、たとひ美を盡くし善を盡くすと雖も、人民の爲に眞實の助けとは成らざることなり、蓋し人民をして、その自己の爲るところに任せ、その志を伸ぶることを得せしめ、それをして自己に勉勵進修せしむれば、すなはち人民の爲に眞實の利となることなり、然るに、何の世の人も、ひとへに誤つて、己等の幸福を受け、平安に日を送るは、法度のある所以に由ること多くして、自己の所行に由ること少しと思へり、且つ人民の開化に進むことは、法度を立つることに由りて得らるゝものと思ふよりして、法度を立つる事を、分外に貴める通俗の說とは成りたるなり、」各府縣より三年或は五年の中に、一二人を薦擧し、立法院に入らしめ、國法百萬分の人を議立し或は議革すること、縱ひ十分に能く其職を盡すとも、人民の立身制行の上に於て、眞實の利益となることは甚だ少し、」且つこれのみならず、昔より今に至り、日に益〻顯然として證知したることは、政堂憲署は、陰虛にして陽實に非ず、奸を禁じ亂を遏むるの用多くして、善を勸め行を勵ますの用少し、蓋し保護の用のみなり、人民の生命を保護し、人民自主の權を保護し、人民の產業を保護するまでの盡して得たるところの果實を享用せしめんが爲に、これを安穩に保全するまでの功用のみ、」律法は、たとひ極嚴なりと雖も、懶惰の人をして勉強ならしめ、奢侈の人をして儉節ならしめ、爛醉を好むものをして酒を禁ぜしむること能はず、かくの如きものは、特に人民各箇に

人民自主の權について論ず

回光返照、人民は政事の實体

身を修め、家を治め、又己私に克たんと欲する志、發生するに非ざれば、改化すること能はざるなり、且つ他の風俗の美善なるもの、その能く人民をして觀感興起せしむることは、律法の權力に比すれば更に大なり、

（三）國政は人民の光の返照なり

邦國の政事は、特に人民各自一己のもの會集して放つところの回光返照なり、」蓋し人民は政事の實體にして、政事は人民の虚影なり、譬へばこゝに一國ありて、人民の品行劣惡なれば、一時その政事優美なりとも、幾何もなくして、その政事必ず退き下りて人民同等の位に至るべし、又一國あり、その人民の風俗優美なれば、一時その政事劣惡なりとも、幾何もなくしてその政事必ず進み上り、人民同等の位に至るべし、」元來邦國は、人民によりて成り立ちたるものなれば、人民の性行の集まれるもの、結果成就して、律法となり、政事となることなり、さるからに、人民と政事とは、その善惡の位價は同等にして優劣なきことなり、譬へば水の如し、その昇降ともに、各〻その自己の水平に至ることを求むるなり、品格尊き人民は、品格尊き政事を以て統治せざることを得ず、蚩愚にして壞惡なる人民は、自ら愚なる政事を以て管理せらるゝことなり、歷く古今を察し、成跡を案ずるに、邦國の優劣強弱は、その人民の品行に關係すること多くして、その國政に關係すること少し、」何にとなれば、邦國は、特に人民各自一箇のもの〻合併せる總名なればなり、所謂、開化文明と云ふものは、他なし、その國の人民男女老少、各自に品行を正しくし、職業を勉め藝事を修め善くするもの、合集して開化文明となることなり、

（四）邦國の盛衰

邦國の昌盛は、人民各自勉强の力と正直の行ひとの總合せるものなり、邦國の衰退は、人民各自懶惰にして自ら私し、及び穢惡の行ひの集合せるものなり、」是故に、邦國に於て最も大害となすべきものは、人の性行壞惡なるなり、此風漸く長ずれば、たとひ律法を以て一時これを剗除すとも、再びまた萌發長育することなり、これ人々自己に過ちを悔い、行を改むるに非ざれば、その弊風惡俗は、決して除き去ること能はず、然るにより、忠愛に厚く、仁惠

を好む人は、特に法度を變じ政事を修むるを事とせずして、專ら務めて民を勸勵化導し、それをして、自ら能く樹立し、主張し、良心を崇うし、善行を修めしむるなり、凡そ人、外より統治せらるゝことに由りて生ずるところの利害は、その關係するところ甚だ小なり、蓋し人間萬事、皆な人々内自ら治め自ら主ることの上に關係するものなり、是故に、君上權を擅にするの國の人民は、たとひ惡政を以て治めらるゝと雖も、これを稱して奴隷の最も卑き者といふべからず、人民の德行を修むるを知らず、自ら私しするの心、及び邪惡の心に使役せらるゝものをこそ、眞成の奴隷と名づけて、當れりと云ふべけれ、かくの如く、人民の心中に私欲生じ、これが爲に奴隷とせらるゝものは、たとひ、如何樣に法度を變じ執政の人を改むるとも、「これ等の事のみにては、自主の人に化せしむること能はざるなり、その國の政府にて、自由の權を專にし、人民を抑下するを以て善しとする不祥の謬說行はるゝ間は、官吏を換へ政事を變ずる等の事を爲し、いかほど力を竭すとも、さらにその益あるべからず、譬へば玻璃鏡に顯はるゝ畫影の種々に變動流移するが如く、つひに著落せる實形となりて、永續する功效はあらざるなり、邦國に自主自立の權あることなれども、その自主の基礎は、人民の性行の上に在るなり、而してこの人民の性行は、實に衆志を合せ、保全を謀り、邦國百事をして上進せしむるの擔保なり、彌爾曰く、覇政の國と雖も、その人民に箇々自立せるものある間は、極惡の徵候を生ぜず、且つ何の政體を論ぜず、凡そ人民の自立を壓壞するものは、これを覇政と曰ふ、と云ふべきなり、

（五）シーザリズムの一派と自助の說と反對なることを論ず

人世を治むる道を論ずるに、古より謬說互に轉じて主となり、週りて復始まることなり、或はシーザルス羅馬古代の帝にして、國權を己に專にするものなれば、を主とし、或は人民を主とし、或は英國君民協議して定むるところの律例を宗とせり、然れども、自立の根元を論ぜざれば、皆な迷謬を免かれず、シーザルスは、人民の己を認めて君主となして順從するものは、これをして福利を得せしむることを務む、この教派は、人民の爲に、百事を具へんと欲す、人民に由りて、一事を成すことを欲せず、この教派を師とせば、必ず衆民天良是非の心を强ひて、

† Cæsarism　* John Stuart Mill.

覇政に陥り入らんとするの患ひあり、」シーザリズムは、極劣の神像なり、そのこれを拝跪するものは、特にその勢力を怕るゝのみ、その甚だしきに至りては、特にその財貨を利するのみ、自ら助くるの説は、これに比すれば、遙に平穏にして弊害の生ぜざる教へなり、世人この説を能く理會したらんには、シーザリズムは、廃棄して再び興らざるべし、この兩説は、互に相容れざるの仇敵なり、維多爾・休哥筆と劍を論じて、彼れ此れを殺すに非ざれば、此れ必ず彼れを殺す、といへるは、轉用してこの二説の反對するものを論ずべきなり、

（六）＊維廉・大亘（ウイリヤム・ダーガン）、自立の事を論ず

國政を論ずるもの、或は人民を主とし、或は君民協議の法を主とす、然れども自立の根源を論ぜざれば、皆な眞成の治道といふべからず、維廉・大亘は愛蘭の忠愛の心深かりし人なり、都伯林愛蘭の都において、百工藝業展覽會を開きたることありけるが、その收場の時、言たることを今こゝに引くべし、我いま眞實を語るべし、我毎に人のインデペンデンス〔自主自立〕といふ語を聞くごとに、吾が國と吾が人民の事を想ひ出さずといふことなし、夫れ自主自立の源、吾が邦より生ずるものあり、又外國人の吾が國に來れるものより得るものあり、然れども、我深く吾が心に悟れるは、インダストリアル、インデペンデンス〔工事を勉強するよりして生ずる自主自立の權〕は、全く吾等自己の力に依賴することなり、」我思ふに、邦民の勉強して工藝を爲すに由つて、今日の如き昌運に至り、光輝を發したるは、未曾有の事なるべし、然りといへども、こゝに止まるべからず、邦人既に一層級を進めたれば、これよりして、恆久堅忍を以ていよ〳〵成就の功を奏すべきなり、我思ふに、邦人鋭意に勉強せんには、今より後、久しからずして、邦人盡く同等の安寧を得、同等の福祉を享け、同等の自主自立の權を得べき地位に至り、又外國の人民と、同等にかくの如き福運を受くべき時、至りぬべし、これ予の深く望むところなり、

（七）貴賤に限らず、勉強忍耐の人、世に功ある事

凡そ諸邦國、今日の景象に至るものは、皆な幾世幾代を經て、諸人或は心思を勞し、或は肢體を苦しめて成就せしものなり、」忍耐恆久の心を以て、職事を勉強する人、尊卑貴賤の別な

く、「土地を耕墾する人、鑛山を檢尋する人、新器新術を發明する人、工匠の人、品物を製造する人、詩人、理學者、政學家」これ等の人、古より今に至るまで、次第に工夫を積めるもの、合湊して盛大の文化を開けるなり、」夫れ文藝の事、百工の業、これを勉強學習する人、常に相繼ぎて絶えざるに由りて、その始め混沌たるものより頭緒を見出し、秩序を定めたるなり、故に今世の人は、祖先の知識勤勞に由りて、學術の產業を傳はり受くるものなれば、これを補修闡明して、後人に遺るべきなり、

（八）英人、自ら助くるの精神ある事

英國の人民は、自ら助くるの精神ありて、勢力を奮起し、百事を勉むること、昔より風俗を成したり、群衆の中に崛起して、其名を顯はし、元來貴顯なる人の上に出づるもの、何れの世にも常にあらざることなし、而して英國の勢力は、實にこれに由りて生ずることなり、」然れども、こゝに亦た著眼すべきことあり、我が邦の上進することは、獨り有名の人の功にあらず、微賤の民、その名も知られざるほどのものと雖も、衆力を合せ、邦國を助くること、その利益、また思はざるべからず、」史册の上に、大合戰を記するに、大將の名のみありて、歩卒の名あらず、然れども、歩卒箇々に英雄の氣象ありて、善く戰ふに由りて、捷を奏することなり、」且つ人民の生涯も、また歩卒の戰鬪に比すべし、その姓名傳はらざるものといへども、傳記に名を留むる大人豪傑と共に、世の開化文明の上進を助くること、甚だ多きなり、」至微至賤の民と雖ども、その職事に勉強し、平生の爲すところ、正直、忠厚、節廉にして、他人の儀表となれば、その國の治化を裨くること、獨り當世のみならず、後代にまでも及ぶべし、何にとなれば、一人たりとも、その行狀良善なれば、自ら他人に傳染し、その模範を互に相師法とし、後代まで廣く行はるゝことなればなり、

（九）實事習驗の學問

凡そ人の精力を出だし、職事を務むることは、最も善き實事習驗の學問なり、而して又大に他人をして、奮發興起せしむるの益あることなり、」彼の大小學校鄉塾にて教ふるところのものゝ如きは、この實事習驗の學問に比すれば、特に入門の初歩に過ぎざるのみ、」我等、毎

日の閲歴よりして、得るところの實益は、遥に學校の教への上に出でたり、されば、我が家の中にも、街衢の間にも、帳櫃の後にも、店舗の中にも、織機の上にも、犁鋤の下にも、寫字房の中にも、工場の中にも、凡そ大衆熱鬧、事務紛繁なる處、みな親歴實驗の學問の在るところにあらずと云ふことなし、」かくの如く學問するを、昔爾列爾、名づけて人類の教道といへり、即ち日用の品行擧動の上にて、自ら身を修め、自ら己れに克つことに力を用ふるなり、かくの如く眞實に學ぶときは、人々一生の間、各々その當然の職務を盡し、事務に應ずることを做し得べし、彼の特に書册より學び、文字より得たるものとは、霄壤の差なり、」倍根曰く、尋常書册上の學問は、人をして、これを眞實の用に供せしむること能はず、又學ばざれども、才智ある人あり、然れども、眞實有用の學は、獨りオブセルヴエイション〔實事實物に就て熟觀審察する〕によりて、贏得せらるゝことなり、」この説、人生實學の要領を握るの みならず、又心靈を修養する道も、これに外なることなし、故に斷じて曰く、人の自らその身を成就するは、作勞より得ること、讀書より多く、閲歴より得ること、藝文より多く、行事より得ること、學習より多く、人品を觀るより得ること、言行錄より多きなり、」

倍根、英國理學大家、永祿四年生、寛永三年卒、

† Bacon.　　* Schiller.

（十）言行錄の、人に益ある事

然りと雖も、豪傑の言行錄、就中、善人君子の言行錄、最も他人を補助し、倡導し、勸勵すること なれば、その教訓となり、裨益となること、甚だ多し、その極善なる人の言行は、殆んど福音書に均しく、その高潔の生涯、高潔の志念、并びにその己れを善くし又天下を善くせんと欲して爲るところの邁往剛烈の行狀は、みな世の教となることなり、」言行錄の中に載せたる前人の模範〔即ちその自ら助くるの力、耐久の志、堅忍の作業、信實の行ひ〕を觀るときは、人々自己の體面を存するの力、并びに自己に依賴することの力は、能く極卑微の人をして、自ら該得の富貴を造り出し、不泯の名聲を建立せしむることを知るべきなり、

（十一）大人豪傑は、貴賤貧富に拘らざる事

學術文藝の大家、大志を抱ける傳法教師、及び寛仁大度の爵位ある人は、固より定まりたる地位より出づるにあらず、又限りたる種族より出づるにあらず、これ皆な或は學校より、或

は工場より、或は農家より、或は貧民の陋屋より、或は貴人の大館より出づることにして、差別あらぬことなり、」有名の傳法教師となれるものにして、歩卒より出でたるものあり、」蓋し貧苦艱難の二者は、決して人の進路を妨ぐるものにあらず、何にとなれば、極貧の人、時としては、極高の地位を占むることあり、又蹉跌すべからざるが如き艱難ありと雖も、終にはその障礙するものを除き去りて、必ず亨通の路を得るなり、且つ此れのみならず、艱難の事は、毎に人をして勞苦忍耐の力を惹き起し、非常の才能を發生せしむることなれば、補助の最も善き者と稱して可なり、古より障礙を蹈越し、奇勳を捷得するもの、その例甚だ多きを觀るときは、「人、一志を以て萬事を爲し得べし、」といへる諺の謬らざるを知るに足れり、」

その著しき例を擧げて、これを證すべし、上帝道學士にして詩人なる惹列迷・泰洛爾、紡糸機器を創造し、製棉工場の元祖たる力查・阿克來、司法官の有名なる典的兒田、山水畫工の絶技なる篤爾涅兒、以上數人は、皆な始めは剃頭業を爲せしものなり、

（十二）舌克斯畢の事

舌克斯畢は、元來何なる種族より出でしや、その說種々にして定まらず、然れども、卑賤より發達したることは疑ひなし、その父は、屠者及び牧人にして、舌克斯畢、幼時、獸毛を梳するを業とせり、或は曰く、舌氏、始め鄉塾に在りて助教たり、後に或人家の書辦となれり、舌氏は、凡そ所有人類の事を知りたれば、「人間萬類の撮要錄」一身に藏したるが如しと、かく比と名づくるも可なり、その舟人の諺語を用ふること切當にして謬らざるがゆゑに、或は舌氏は必ず水手たりしことあるべしといへり、その著書中に傳法教師の事の委曲を盡くしたれば、舌氏は必ず牧師の書班たりしことあるべしと考論するものあり、又その馬の皮肉を能く分別定斷したれば、或は馬商なりしとも云へり、」然るに、舌氏は切に優人なりしなり、その年時を送る間、平生、試驗觀察に由りて得たる學識を、盡く戲曲に顯はせり、蓋し舌氏は深沈なる書生にして、勉強して業を做せる人なることは疑ひなし、その著はすところの書、人心を感ぜしめ、我が英人の品行を造り成すの益あり、今日に至りて、盛んに世に重ぜらる、

* Shakspeare.

† With will one can do anything.

光武帝曰、有志者、事竟成、正與此諺同、

舌氏、祿永七年生、元和二年歿、

英國詞曲の名家なる舌克斯畢は、

古克、安永八年生、文政十一年歿、

馬禮遜、住支那二十五年、天明二年生、天保五年歿、

（十三）貧賤より出でたる豪傑の人

日工よりして起れるものは、量地官たる伯倫德例、航海に長ぜる古克、詩人薄爾尼斯等なり、坊者磚人より出づるもの、中に、便・戎孫は、手に鏝を持し、懐中に書を納れて、操作せしといへり、その他、量地官たる義德瓦圖及び的爾福德、地學博士たる休・彌爾列爾、著書家及び彫像匠たる亞蘭・勘寧舍、みな坊人磚人より出でたる人なり、木匠より出でたる卓犖の人には、建造工人たる意尼額・若涅士、時辰標の有名の工人赫利孫、人物の體質を察する學者潤・翰他、畫家洛模尼、及び窩比、東洋の學に通ずる李、彫像匠たる戎・奇伯孫等なり、織工よりして起れるものは、算學家西模孫、彫像工倍根、上帝道學士米爾納兄弟二人、亞坦・話兒客兒、上帝道學士戎・福士的爾、禽學者維爾孫、傳法教師律賓士敦、詩人丹納喜爾等なり、鞋工よりして起れるものは、有名の水師提督古勞垤士禮・叔夫爾、電氣博士斯打戎、文章家撒母耳・德留、「クヲートルレイレビユー」書を著せる吉福德、詩人伯路模非爾德、傳法教師維廉・加禮等なり、勉強刻苦せる傳法教師馬禮孫は、履法を作る工人なりしなり、

knight
knight

Ojive.

Hobson:
Andrew Johnson

† Andrew Johnson.

* Admiral Hobson

近き數年以來、蘇葛蘭に托馬士・義德瓦圖といへる草木鳥獸を究むる深奥なる學者、また鞋匠より起れり、その職業を爲せる餘暇を以て、この學科に心を盡くしけるが、小蟹の類を查究して、新に一種を看出したり、學士家因りてこの蟲を、ブラニザ エドワルジアイと名づけたり、

裁縫匠より、亦卓犖の才を顯はせる人出でたり、史家戎・斯到、畫家若孫、嘗てこの業をなせり、好古斯吳德は、波都地の戰に、功名を顯し、義德瓦第三より恩賞として、奈的の爵を賜はりしが、少年の時は、倫敦の裁縫匠の徒弟なりしなり、」水師提督河伯孫は、一千七百二年、士班牙未額港の戰に、水閘を破りし勇將なりしが、亦この業を爲ししなり、」河伯孫、少時、懶的の裁縫匠の家にありける時、英國一帮の軍艦、此島より出帆すべき新聞をきゝて、急に海岸に走り往き、その光景を見たりしが、この小童、忽ち大志を生じ、水軍の人とならんと思ひ、一小舟に跳り入り、軍艦の處まで漕ぎ往き、船將に乞ひて、義兵となりたり、」數年の後、功名を荷ひて、故鄉に歸り、昔し賤業を爲ししし小舍に來りて飲食せしとなり、」然れども、裁縫匠の大豪傑は、安德留・戎孫に如くものなかるべし、即ち當今合衆國の大頭領に」

して、卓絶の行、心思の力ある人なり、邑中の長老たる時、大會の中に於て、立法の事を辯論しけるが、衆中に呼はるものありて曰く、彼は裁縫匠より起れりと、戞孫、この譏刺の言に答へて曰く、「誰やらん相公、予を裁縫匠なりと云はるゝこと、予に於ては少しも妨げとは思はぬことなり、何にとなれば、余この職業を爲せる時、良工の名を得たり、又主顧の客に約したる期限を違へずして、善くその衣を製成したり、」と言ひしとなり、

カルヂナルの法官の長烏爾西、埒夫、亞堅犀德、客爾古・懷的は、皆な屠家の子なり、伴陽は、補鍋匠なり、淑瑟弗・蘭加斯德は、籃匠なり、蒸氣機器を創造し、大名を顯はせる牛國民、瓦德、士提反孫は、その始め牛は打鐵匠、瓦は算具を造る工人、士は火器を運用する人なりしなり、」說法者翰丁同は、煤炭を擔ふ人、木版に畫を雕ることを始めたる伯維格は、煤炭を掘る者なりしなり、」獨德士禮は、步兵より、河爾克洛弗的は、園人より起れり、航海者拔欣は、その始めは、船檣の前に供事する人なりし、古勞埒士禮・叔夫爾は、船房の小販なりし、花設爾は、軍隊の中にて、オボウ類笛を吹く人なりし、長托禮は、旅行する雕工なりし、壹逮は、旅行する印書匠なりし、托馬士・老連士は、酒家の子なりしなり、」彌開爾・發拉第は、打鐵匠の子にして、廿二歲に至るまで、釘書匠の徒弟となり、その業を爲せり、今は上等の理學者となりて、窮理科の深奧にして解しがたきものを、明かに辨析することは、その師翰弗禮・大未と雖も、これに及ぶこと能はずと云へり、

（十四）有名なる天學者

天學を以て名を顯せるもの、中に、哥白爾尼加士は、波蘭の麵包を燒く者の子なり、客不列爾は、日耳曼酒家の子にして、その身は給事しける小販たりしなり、亞連白爾士は、冬夜に巴理のセン、ジョン、ルロンドの寺院の石階に棄てられし孩兒なりしを、鑲玻璃工の婦、拾ひ取りて養ひしなり、牛童は額蘭亭の小農の子にして、拉不禮士は、紅弗留爾の貧民の子なり、これ等の卓越なる人、いづれも、幼少の時、甚しき患難に逢ひたれども、その英才を以て力學せしにより、普く天下の財貨を以ても、買ひがたき程の不朽の大名を得たり、」貨財に富めるものは、却つてこれが爲に、進修を障礙せらるゝものなれば、その害たる、貧賤より大なることなり、拉額蘭日は、天學及び算數に明かなる人なり、その父、株林以太利地の武庫の官

たりしが、億りし事中らずして、産業を敗り、極貧に至れり、拉額蘭曰、常にその後來名聲及び幸福を得たることを、少き時貧困なりし事に歸して、「予をして、若し富人ならしめば、算學者となることは得ざりしならん、」と曰へり、

（十五）クレヂーメン牧師と譯す、法官なり

クレヂーメンの子より、史冊上に名を顯はせるもの、特に著しとす、德勒克、納爾森は、海上に於て功名を立てたる人なり、售拉斯敦は、上帝道博士なり、雍は、農學の書を著はせる大家なり、普禮揮爾は、算學の名家なり、白爾は蒸氣船を創造せし人なり、鳥連は、建屋の名工なり、禮諾爾圖、維爾孫、維爾啓は、いづれも、有名の畫工なり、索兒婁、堪不白爾は、みな律學の大家なり、閼垤孫、托模孫、哥獨德斯密士、格列立地、典涅孫は、詩人文士の最も著しきものなり、」勞爾德爵名哈爾定日、參將義德瓦爾垤士、守備何德孫、みな印度の戰に功名を顯はせる人なるが、亦クレヂーメンの子なり、印度の英領は、實に中等種族の人に賴りて、勝ち得られたるなり、即ち屈來武、瓦爾連・哈斯丁士及び其他これに繼ぐ者、みな久しく商家舖店にありて、職事を作せしものなり、

（十六）アットルネース狀師の卑き者等、その他、卑賤の人の子にて名を顯はす人

アットルネースの子より、卓越して名を成せるものは、巴德門・拔爾古、斯彌敦、斯格的、窩圖窩士、索末爾士、哈德維克、段寧等なり、以上三人は、勞爾德の爵に上れり、維廉・伯拉克士敦は、賣絲商の子なり、勞爾德吉福德は、德夫爾の雜貨商の子なり、勞爾德田曼は、醫者の子なり、按察司答爾福爾德は、釀酒家の子なり、勞爾德波爾洛克は、鞍匠の子なり、禮亞德は、尼尼微の故跡を搜出せる人なりしが、倫敦狀師館の書辦の子なり、維廉・亞爾模斯倫は、水力機器及び新製の大砲を發明せるものなるが、また嘗て法律を學び、アットルネーの事を爲せり、彌爾敦は、倫敦の呈狀を代寫する者の子なり、波伯及び掃謝は、麻賣商の子なり、學師維爾孫は、沛士禮に住する製造工の子なり、勞爾德馬高禮は、亞弗利加に旅する商人の子なり、基子は、賣藥商の子なり、翰弗禮・大未は、始めは藥舖家の徒弟たりし

なり、大未嘗て云く、「予の今日の遭際は、予の自己を造り成したるものなり、これ虛飾の言に非ず、心中の實を語るものなり、」と云へり、名家なりしが、少き時は、軍艦中給事の人にして、中年以後に至りて、始めてその業を修めたり、十年の間、醫科學校にありて、潤・翰他の集めたる、宇宙萬物及び術藝器物の目錄を編著せるに由りて、その博學の基を造りしといへり、

（十七）　卑賤より起りて大名を得たる外國人の事

自己の勉強と才能とによりて、貧賤より崛起して大名を世に揚げしもの、外國人に於て、その例もまた少なからず、畫家口勞德は、麵包を作る者の子なり、彫像工奇弗士は、麵包を燒くものゝ子なり、畫家留波爾德・羅伯は、時辰標匠の子なり、樂歌を作れる有名の海同は車匠の子なり、始めて影相を金版に留むることを發明せし達礙爾は、戲臺に用ふる風景を畫ける者なりしなり、」羅馬法王とたりし額列鄂禮第七は、木匠の子なり、希臘の理學家琴克斯丟斯は、牧人の子なり、羅馬法王亞獨利安第六は、和蘭の船を漕ぐ者の子なり、亞獨利安、童

Thomas Edison. Boys! Have you ever Thomas Edison seen a lovely Picadery fairy who walks through the woods

* Vauquelin.

子の時に、學問する爲に、蠟燭を買ふこと能はざるが故に、寺門或は街中の燈ある處に就きて、課業を爲せり、かくの如く忍耐勉強なるに由りて、後來卓絶の人となりたり、」金石學者荷壹は、織工の子なり、器學家荷的弗列は、「阿連士の燒麵者の子なり、算學者約瑟弗・夫理爾は、窩吉士耶の裁縫匠の子なり、建屋工丟蘭德は、巴理の鞋工の子なり、金石草木鳥獸學者なる惹士納爾は、時立克の皮工の子にして、その學業に從事する間、貧苦疾病及びその他の災難に遇ひたれども、これがために、その勇氣を失ひ、進修を怠ることなかりき、古諺に曰く、「許多の做すべき事ありて、これを勉め做さんと欲する人は。必ず許多の光陰を尋ね出すべし、」と、惹氏の平生を觀るときは、此言の眞確なることを知るべきなり、」法國理學算學の名家なる比爾列拉繆士は、必加爾第の貧人の子にして、童子の時、牧羊を業とせしが、これを爲すことを屑しとせずして、巴理に逃れ往き、許多の艱苦に耐へ勝ちて後に、拿華列の學校に入り、奴僕となることを得しが、それより幾時もなく、當時有名の人とはなりにけり、

（十八）　製煉家卯格林の事

製煉家卯格林は、加爾華德士法國地名の農民の子なり、鄉學にありて、學童となりし時に、衣服襤褸なりしが、その聰敏の才を顯はせり、その師の讀書作文を教ふる者、卯格林の勉學を譽めて、童子努力學習せよ、他日、汝、聖會保長の如き衣服を著くるに至るべし、」と云へり、一の藥舖主人、この學院に至り、この童子の身體壯強なるを嘆美し、その己れの店舖に至り、藥材を秤量せんことを勸めければ、卯格林これを承允しけり、然るに、その家に移る後、學問を爲るの暇あらざるを以て、遂にこゝを去りて巴理に赴き、藥舖家に給事せんと欲し、これを覓めしが、尋ね得ざりければ、卯格林、大に勞慮失望して病を發し、病院に入れられ、命を失ふべしと思ひし程なり、然るに幸にして快復し、後つひに、夫爾克雷と云へる有名の製煉家に知られ、私室の書辦となりしが、多年の後、夫爾克雷歿して、卯格林これに繼ぎて、製煉學の學師となりたり、千八百二十九年に、加爾華德士に於て、民委官を選びける時、卯格林その選擧に當り、その職を盡して後、榮名を荷ひ、昔し貧賤なりし時、離れしところの故鄉に歸りしとぞ、

（十九）法國に於て、步卒より登用せられし人

法國始めの變亂以來、軍中の卒伍より貴顯の武官に陞ること尋常の事となれり、英國に於て、これに比すべき例あらず、諺に曰く、「功名の路は才能の人の爲に開く」と、實にこの言の如く、若し登庸の路の開けたるものあらんには、我が英人も、また必ず彼に雙ぶべきなり、何西、含白爾土、比斯額魯は、皆な步卒より登用せられて、その閱歷の路を始めたり、何西は、王の三軍の中にありしとき、常に短衣を刺繡し、これに因りて金錢を得て、兵書を買ひたり、含白爾土は、幼年の時に放逸なりしが、十六歲に及んで、家を出で、南西の商家又立翁士の工人の家に奴隸となり、又は兎皮を販する人に給事しけるが、二十二歲の時、義兵の籍に入り、一年を過ぎざる中に、營將に至れり、古禮倍爾、路費伯爾、蘇晒、維克土爾、蘭納士、瑣爾的、馬士色納、仙・細爾、德亞倫、謨拉的、窩熱羅、白西列士、內、以上の將帥、みな卒伍より起れり、然るに、或は速かに超拔せられ、或は擧擢せらるゝこと遲くして一樣ならず、仙・細爾は、多爾の皮匠の子にて、始め戲子となりしが、後に輕騎の兵籍に入

り、一年の内に、甲比丹の職に上れり、白爾諾の公、維克土爾は、一千七百八十一年に、銃隊に入りしが、法國變亂の事、未だ起らざる以前に、その籍を脱せられたり、既にして、戰爭起りければ再び兵籍に入り、數月の間に、その才略勇氣に由りて、アジユタント、メージヨア〔副都統〕及びバタリヨン〔一旅五百人〕の長となれり、謨拉的は、百律臥徳の酒家の子なり、始め輕騎隊に入りしが、骯髒にして、人に服せざるが故に、その職を罷められけり、然るに、再び兵籍に入り、幾何もなく、參將に至れり、次第に位級進めり、古禮倍爾、忽ち内の軍功を看出し、ゼ、インデフアティゲブル〔疲倦を知らざる人〕と名づけて、これを副將に擢でたり、時に僅に二十五歳といふ、以上の諸人は、かくの如く、登進甚だ速かなりしなり、然るに、瑣爾的は、始めて兵籍に入りしより、六年を經て、纔にサアジヤント〔軍吏〕と爲れり、その後、次第に登進し、コロネル〔參將〕、ゼネラル、オフ、チヴイシヨン〔一隊提督〕、マーシヤル〔總兵官〕に至れり、瑣爾的曰く、予、軍吏の職を得たることは、多少の勞苦を積めり、その後得たる他の位級に比すれば、尤も難かりしなりと、」法國に於て、卒伍より將領に登進すること、今日に至るまで、相踵けり、商額爾

* Brotherton.

尼は、拿破崙第三の對手なる大將なり、一千八百十五年に、王の侍衞兵の籍に入りしといふ、」マアシヤル葡紹は、四年の間、歩兵を爲せし後、一官を得たり、」マアシヤル闌同は、當今法國軍務のミニストルなり、その掌鼓卒より起りし故に、閉爾西の集畫閣にあるところの畫像は、その手を鼓上に置けり、これ闌同の需めに應じて、かく畫きたるなり、」これ等の例に因りて、法國の歩卒は、元帥の持てる杖を、衣糧袋に帶ぶべき望みを以て、戰鬪に勇志を奮ふことなり、

（二十）伯洛沙敦の事、〇以下四章、專心强力に由りて、卑賤より高位顯職に至りし人を擧ぐ

英國幷びに外國に於て、專心强力、久しうして倦まざるに由りて、卑賤の業を爲せるもの より、高位顯職に至り、國家を裨益する者甚だ多くして、世人の耳目に珍らしからぬことになりたり、」かくの如く卓絶なる人の平生を觀るときは、その早年に艱難と戰ひ、災禍に敵することは、後來の享通利達の爲には、必用にして少くべからざることを知るべし、英國百姓

* Mr. Fox.　† Mr. Lindsay.

議院には、常に自己の力に賴りて發達したる人、甚だ多し、元來職業に勉強する人民に由りて、選擧せられ、議士となることなれば、然あるべき道理なり、英國人民、立法の權あることの信證と爲して、この議院に於て、各部落より薦擧せる民委官を歡接し尊敬することとなり、」近き比、約瑟弗・伯洛沙敦は、薩爾福德の民官委なりしが、十時議單の事に因りて議論せるときに、嘗て自ら棉磨の工場に在りて小僮たりしとき、勞苦困難を受けしことを委曲に述べて、予この時よりして、他日もし運會を得たらんには、務めて此情勢を改め好くすべしと志したりきと、その眞情を云ひければ、惹迷士・額拉含、直ちに座より起ち、闔院喜色を形せるの中に於て、次の言を出して、「伯洛沙敦君は、かく卑賤より起られしにや、余は今日まで知らざりけり、そも〳〵新起の人にして、世襲の紳董と、肩を比べ、位を同じうせらるゝことは、元來議院に在る者よりは、榮光遙かに勝れることなり、」とぞ言ひける、

（三十一）福克斯、林德西の事

福克斯は阿爾譚の民委官なりしが、昔年の事を憶ひ出して、常の習ひに、「余、諾維古に在りて、織匠の小僮たりしときに云云、」と云へり、其他、今日巴力門議士に、かくの如く卑賤なりし人、尚ほ生存せるものあり、」林德西は、舟を有てる有名の人にして、近頃まで、散拯爾蘭の民委官なりしが、嘗て政論對敵の黨より林德西を誹謗しける時、衛毛士の民委官を選ぶ人に向つて、その生平の事を朴實に語りけり、」十四歲の時、父母に別れ、額拉士哥より、立拔普爾に赴かんとて、蒸氣船に入りけるが、船賃を償ふこと能はざるが故に、その代りに煤炭を積み入れんことを船主と約し、この勞事を爲したり、既に立拔普爾に著して後、四十九日の間、職業を求め得ずして、辛うじて雨露を凌ぎ、時日を過せり、後に船中の小斷と爲ることを得たりしが、その堅固なる善行に由りて、十九歲の時、船主となりたり、」年二十三に及んで、洋海の職を休めて、海濱に居住を定めたるが、其後、その身顯達すること速かなりき、自ら曰く、「予は著實に勉強し、常に勞作して怠ることなく、又人より施されんことを欲する事は、我れこれを他人に施すべきの大道理を、常に目存したるに由りて、福運を得たりしなり、」と云へり、

（三十二）＊維廉・若克孫の事

Mr. W. Jackson.

維廉・若克孫は、當今北達比社の民委官なり、その遭際甚だ林德西に似たり、その父は、蘭加斯德の醫士にして、子十一人を遺して死したるが、若克孫は、その第七子なり、その子の既に長ぜるものは、父の生存の時に、教育を受けたりしが、その幼なるものは、父死して後、各々離散して、自己に衣食を圖ることゝはなれり、若克孫この時十二歳にて、鄉校に在りけるが、こゝに居ること能はずして、一舟の傍に於て、曉六時より、夜九時に至るまで、勞事を爲しけり、既にして、その主人病に臥しければ、若克孫に命じて、その寫字房に在りて、事を司らしめたり、こゝに於て、頗る餘暇を得て、英國博物韻府の卷帙浩瀚なるものを、首より終りに至るまで通覽せり、晝間にも讀みたれども、大抵は、夜中の業なりしなり、」其後買易の業を爲しけるが、その勤勉に因つて、贏利を得たり、」今は若克孫の帆船、四方の洋海に駛せ、地球上の萬國と、互市を通ぜり、

（三十三）＊力查・格伯田の事

力查・格伯田、また卑賤より起りし人なり、索塞の小農の子にして、幼年の時に、倫敦のシティの交易繁盛の市街に送られ、貨物棧房の小廝となれり、格伯田、勤敏にしてその行ひ正しく、又甚だ見聞を廣むることを好みけり、その主人は、昔し鄉校に在りて學びたる人なりし故、格伯田の書を讀むことの過度なるを見て、これを戒めけるが、この童子己れの嗜好に任せ、書中に遇ふところの寶貨を、その心に貯ふることを勉めたり、」これより次第に發運し、後に滿遮士打に住し、白布に花を印することを業とせり、格伯田、常に公衆の疑問に心を用ひ、就中、民衆の教育たるべき事に意を注ぎたり、抑も古より英國に於て、穀物入口の稅を收むること、立てゝ法制となりしが、格伯田この法の公益ならざることを熟知し、これを廢せんと欲して、錢財を費し、心力を竭したり、既にして巴力門公議協同して、この法を廢せしは、實に格伯田の力なり、」格伯田始めて公會に於て宣說せしときには、言辭拙くして、敗れを取りたれば、發憤して言辭を學習し、久しうして怠らず、後遂に談說勢力ありて人を勸誘する

宣論者と稱せられ、羅伯・比爾（ロベルト・ピール）比爾は、始め穀稅法を廢する說を駁せるもの なりしが、後には格伯田の說に同じけり と雖も、これを稱譽するに至れり、」法蘭西（フランス）の國使德路溫（ドルーオン）・德（ルウイース）路維士、巧みに格伯田を評して、「彼の人は、凡そ人の耐久勞苦に由りて事業を成就することを得べき生存せる明證なり、彼の人は、自己の賢能功力に由りて、極卑賤よりして、至高の地位に至る者の中に於て、最も善き模範を具へし人なり、彼の人は、英人に賦する堅實の性の最も著れたる表樣なり、」と云へり、

（二十四）勤勉に非ざれば、百事、工妙に至る能はざる事

何等の情事に限らず、專精にして勤勉なれば、必ず卓然たる大名を以て、價銀となしてこれに償還せらるゝことなり、何等の藝業に限らず、その絕妙極美の地位は、懶惰なる人の能く達する所に非ず、人をして富饒ならしむるものは他なし、勤勉の手、勤勉の心のみ、人をして才智を長じ、事務に當らしむるものも、また此の二者のみ、」たとひ富貴の家に生るゝ人と雖も、凡そ眞實の聲名は、心を專らにし、力を用ふるに非ざれば、贏ち得ること能はず、何ぞにとなれば、田畝の產業は、先祖より傳はり受くることを得べけれども、學問及び才智の產業は傳はり受けらるべからず、貨財に富める人は、己れの作業を他人に爲さして、之を償ふことを做し得べし、然れども他人より思慮の力を己れに得て、これを償ふこと能はず、又自ら修養すべきの事を買ひ得ること能はざるなり、」故に「凡百の事業の絕妙極美に至ることは、特に專心勉力に由りて贏得せらるべし、」と云へる教語は、貧富に通じて皆な用ふべし、蓋し德留及び吉福德（ギッフォード）は、補鞋工の藁店を以て學校と爲せり、かくの如く苦學せざれば、富人と雖も、百事その妙處に至ること能はざるなり、

（二十五）富貴の人、また自助の力を要す

富貴安逸は、人の才德を修養する爲の必須のものには非ず、故に古より今に至るまで、天下の利、邦國の益は、極卑賤より起れる人の力に賴ること甚だ多し、」蓋し安逸驕侈に生長する人は、艱難の事と、爭競すること能はず、又人生に缺くべからざる奮勉剛猛の力を生じ出だすこと能はざるなり、故に貧苦に逢はざるは、人の不幸なり、然れども、能く自ら助くるの

勢力を發し、安逸の事と戰ひて、これに勝ちたらんには、不幸を轉じて幸福と爲すべし、蓋し安佚と才德とは、兩立せざるものなり、故に人往々己れの才德を貶して安佚を買ふものあり、然れども、正直誠實なる人は、安佚驕侈と戰ふて、自己の勢力を生じ、自己に信仗して、遂に凱勝を奏することなり、倍根曰く、世人、富と力と二つの者を能く理會するもの少し、故に富を以て力より重きものと思へり、其實は然らず、自己の力に依賴し、自ら澹泊を守る又自ら儉節を守ると譯す　この二者、實に人をして自己の井水を呑み、自己の麵包を喫せしめ、又人をして職事を學習し、勞作し、及びその當に爲すべきの善事を行ひ遂げしむることなり、

（二十六）富貴に生れて征陣の苦を甘んずる人

富みて財多きは、人をして安逸に誘かしめ、自暴自棄に惑はしむるものなり、故に大產厚資の家に生れて、遊樂を蔑視し、勤勞の事を務めて時日を送る人は、その榮名、最も大なることなり、英國に於て、富饒の人にして、國家の事に勤勞し、危難の任に當るものは、甚だ世に崇敬せらるゝことなり、ペニンシユラの戰に、加比丹の次官なる人、その隊伍の傍にあり、深泥の中に、艱難行步するを見て、或人これを稱贊し、「彼に一年の產一萬五千金の人步行せり、」と云ひけり、今時に在りて、色拔斯土卜兒の寒地、及び印度の熱土に於て、爵位ある資產ある人、己れの國の爲に戰鬪に勇み、生命を拋ちたるもの、多く芳名を不朽に傳へたり、

（二十七）富貴に生れて有名の學士となれる人

富貴の人にて、理學或は工藝に從事し、卓絕の名を得たるもの、少からず、」その例を擧ぐれば、理學の父と稱せらるゝ倍根の如き、藝術の士に於ては、烏斯德、倍爾、加便垤西、答爾樸、洛斯の如きもの是れなり、洛斯は爵位ある家に生れたる器學の大家と稱すべし、然れども洛斯もし爵位の家に生れざれば、必ず上等の創造者と稱せらるゝに至るべし、」嘗て一の大なる工場に於て、衆人操作せることありき、一の工人、洛斯の爵位ある人なることを知らずして、强ひて洛斯に請ひて、その頭人となせしことありき、かく迄工事に明かなりしなり、」洛斯の自ら製する望遠鏡は、古來より比類なきものなり、

（二十八）名門右族に生れて政學文章に長ずる人、附羅伯・比爾

政學家文章家に、名門右族より出づる人少からず、この學科に於ても、また勉強學習の功を積まざれば、成就に至ること能はず、故に巴力門の頭位に在るものは、必ず皆な勉強勞苦を極めたる人なり、巴麥斯敦、大伯・拉設爾、垤士禮立、額拉特斯頓の如き、皆な是れなり、」以上諸人は、巴力門の繁劇なる時に當りて、晝夜ともに勉勞を作せり、羅伯・比爾は、今世の最も勉強なる人なり、比爾、精力常人に絕れ、常に心思を用ひて、客惜することなし、その履歷を觀るときは、中等の資性を具ふる人と雖も、勉強して心を用ひ、勞力して倦むことなければ、許多の事業を成就すべきことを證知すべきなり、」比爾、四十年の間、巴力門の議士に列し、その功勞甚だ大なり、」常に良心に從ひて諸事を行ひ、必ず貫徹するまでに爲したり、」凡そその論辯するもの、必ず豫め詳かに學習して、然る後に或は言に發し、或は文に書せり、つひに倉卒に出づるものなし、」その自ら心力を勞すること、殊に過甚にして、人に接見するにも、各々その人の器量に隨ひて、これに體貼將就して、餘力を惜まず、」且つ又實事習驗の智と、志向堅定の力と、及び兩目兩手を著實に運用するの才あり、就中一事尤も他人に超絕するものは、その持論、歲月を閱するに隨ひ開拓擴充せり、」年已に老いると雖も、その氣象たゞ衰縮せざるのみならず、益々粹美純熟に至れり、」死に至るまで、新見異說を聽納することを爲せり、人多く思へらく、「比爾は謹愼に過ぎたり」と、然れども、比爾、實に從前の見識を以て、自ら善しとするの心なし、蓋し自ら善しとするの心は學問の癡瘋にして、老年の人をして、また進境あらざらしむるものなり、

（二十九）勞爾德爵名*伯路寒

伯路寒の强勉にして倦むことなきは、世人の遍く知るところなり、」その公務に勤勞すること、六十年に過ぎたり、その間、或は法律、或は政事、或は藝術に從事し、何れも卓然衆に超えずといふことなし、何なる工夫を用ひて、かくの如く、許多の事を成就し得たるや、定めて祕密の方あるべし、と疑はる、程なり、」或人、嘗て撒母耳・羅彌爾禮に向つて、一の新功を企てゝ爲さんことを請ひければ、羅彌爾禮推辭して、「我れは、これを爲すの暇あらず、然れども伯

* Brougham 伯路寒、安永七年生、明治元年歿、

路寒ならば、暇あるべし、彼の人は、何事を爲しても、暇あらずといふことなし、」所謂祕密の方は他にあらず、伯路寒、ミニユートの暇といへども、空しく過ごすことなし、幷びにその身體剛強にして鐵の如し、」老年に至り、尋常の人ならば、世間勞苦の事を辭して、安逸を消受し、床榻に凭りて盹睡して、時日を送るべきに、伯路寒は、この時より、光線の法を始めて考究し、心力を勞し、終にその功夫を成就し、倫敦、巴理の碩學名家をして、集會論定せしむるに至れり、」且つ此の時またその著はせる「若爾日第三の時代文藝學術の人」といへる書を印行し、又公侯議院に於て、律法及び政事の議論ある時には、必ずこれに預かりしなり、」細德尼・斯密士、嘗て伯路寒に勸めて、「精強なる人三人の爲して成就すべき事功を以て限りと爲して、それよりは過ごし給ふべからず、」と云ひけれども、伯路寒は、勉強することを好み、久しく習ひて癖をなせり、故に何ほど專精に心を用ふとも、これにて大過なりとすることなし、」その爲るところ、何事に限らず、極善極妙に至ることを務めとせり、故に世人評して、「もし伯路寒をしてシユーブレッキ〔鞋を擦く人〕ならしめば、英國第一のシユーブレッキとなることを得ざるうちは、勉強して止まざるべし、」といへり、

（三十）律敦の事

＊律敦、文化二年生　＊ Sir E. Bulwer Lytton.

伯爾乞・律敦は、また貴族に生れて、彊志勉學の人なり、その著すところの書に、小說あり、詩あり、戲曲あり、史類あり、文章あり、ことごとく世に稱せらる、又辯論に長じ、政學を善くせり、律敦、安逸を嫌ひ、熱心勉強して、妙處に至ることを務めとせり、」故に當時、英國著書家の中に、律敦の如く著書に富み、盛譽を得たるものはあらず、抑も、射獵を好み、守逸を事とし、屢〻宴會に赴き、演劇を樂み、倫敦千百の歡娛を極め、或は遠く巴理、維也納、羅馬に遊ぶことは、大產を擁し、樂事を嗜む人の通常の習ひなるに、獨り律敦は、一意に藝文の事に努力し、更にその他の嗜好あらざりけり、」その始めに著せる書は、歌詩の體にして、ウィーゾ　エンド　ウァイルド　フラワース〔野草野花〕と云へるものなりしが、世人に毀られたり、」次に作れるものは、小說にして、ファルクランド書名なりしが、また敗れを取れり、弱志の人ならば、必ず著述の業を拋廢すべきに、律敦は、勇敢にして進み、堅忍にして撓まず、益々博く書を讀み、務めて工夫を下し、終に敗れを轉じて功となしたり、ファルクランドを

著せし後、一年に滿たずして、ベルハム名書を出で、その後三十年の間、陸續として書を著し、文場に名を震ひたり、

（三十一）＊埃士禮立の事

埃士禮立、また勉強學習の力に由りて、盛名を世に得たる人なり、その首先は律敦と同じく、文場に馳騁せしが、また屢〻敗北したる後に、功績を奏せり、」その著せるウオンドラス、テイル オフ アルロイ及びレヴォルショナレイ エピック、俱に世人の誹笑を受け、文辭の顚狂と稱せられたり、然れども、埃士禮立廢沮せずして、功夫を續ぎたり、其後に著せる、コニングスベイ サイビル タンクレットは、果して妙絕にして世を驚かせり、」埃士禮立また辯論に長ぜる士なり、始め百姓議院に於て、一句ごとに大衆に笑はれたり、然るに收場の一語、後日の讖を爲したり、「予、平生幾度も、許多の事を爲し始めたりしが、終に至りて必ず功績を成就せり、予、今この席を退くべし、然れども、諸君、吾れの議論を聽かれん時は、必ず來るべし、」と云ひけるが、果してその時來りて、埃士禮立、公會の中に於て、大に衆人の視聽を驚かしたり、」埃士禮立は、尋常少年の一度敗績すれば、輒ち退縮して氣を喪ひ、歎息して悶を發するが如くならず、却つて益々艱苦して功を用ひたり、」常に心を留めて、己れの短所を改め、聚聽の時の儀觀を學び、言語の方を習練し、又務めて巴力門の典故事實を記憶す、かくの如く積久の勉力を經て、方に始めて其の志を達しけり、曩昔敗績したる痕跡、盡く抹し去りて、巴力門論辯家の最も完全にして最も效能あるものと、一世に許さるゝに至れり、

＊ Mr. Disraeli. 埃士禮立、文化二年生、

（三十二）＊窩圖窩士の論、幷びに多克未爾の事

上に記するところ、及びこの下に錄する所の古今人の例を觀るときは、人たるもの、自己發奮勉勵の力に由りて、許多の事業を成し得べきことを理會すべし、然れども、一生の間、他人より輔助の益を得ることも亦大なれば、こゝに著眼せざるべからず、詩人窩圖窩士曰く、

こゝに二事あり、互に相背反するものゝ如くにして、相並んで行かざるべからざるものあり、卽ち堅く人に倚賴するとの二事なり、」凡そ人、幼年より、老年

＊ Wordsworth. 窩氏、安永三年生、弘化三年歿、

に至るまで、身體の養育と、德性の修養と、皆な共に他人より裨益を受くること、少なからず、故に最も良善なる人、及び最も剛強なる人、常に他人より助けを得たることを最も速かに招認することなり、亞歷西士・德・多克未爾の履歷を引いて、これを證すべし、多克未爾の父は、法國の爵位ある人にして、その母は有名の馬爾士海伯の孫なり、その家世隆赫なる故に由りて、僅に二十一歲に及んで、華瑟爾士の聽訟官に任ぜられたり、然るに自ら思ふは、予この職任を受け得たることは、吾が身の功勞あるに由るに非ず、故にこれを辭し去りて、今よりは自己の力に由りて、後來の榮達を取るべしと、遂に毅然としてその任を罷めて、合衆國に遊びけり、その有名の書デモツクラシイ　イン　アメリカと云へるものは、これに由りて成就したるなり、その友哥士體復・德・菩門的は、多克未爾と偕に旅行せるものなるが、多克未爾の、旅中勉強にして倦まざることを記して曰く、「その性質、酷だ懶惰なることを嫌へり、行旅する時と休歇する時とを論ぜず、その心は、つねに工夫を用ひたり、亞歷西士と談話せるもの〻中に、その最も愉快なるものは、乃ちその最も緊要なるものなり、曰く、「凶日は、失ひし日なり、即ち惡しく費せし日なり、分毫も光陰を失へば、懊悵に堪へず」、多克未爾嘗て一友に書を與へて曰く、「人、一生の間、全く作用を止むることを得る光陰はあらざることなり、蓋し自己の外より得たる力と、及び自己の內より生ずる力とは、共に缺くべからざるものなり、余嘗て斯の世の人を沍寒の地に行旅するものに比喩したり、寒氣愈々甚だしき地に至れば、行步愈々速かにせざるを得ず、人心の最も大なる病害は、寒氣の如し、故にこの怕るべき病害に抵抗せんと欲せば、人まさに心思を運用し、又朋友と共に職事を勉め、暫くも間斷なかるべし、」と云へり、

*多克未爾　文化二年生、安政六年歿、　* Alexis de Tocqueville.

（三十三）　多克未爾、他人より助けを得たることを招認する事

多克未爾は、自己勉強の力を出し、自己に憑賴することを、最要の目的と爲せし人なり、然れども、また他人の資助及び扶掖を重んじ、これを招認すること、最も深かりしなり、蓋し天下の人、全く他人の助けを受けざるものなし、特に多少の異なるあるのみ、」多克未爾、その友德・容兒臥禮及び斯士弗爾士より裨益を受けたることを招認し、その恩惠に感ぜり、これその神志の助けを、容氏より得、その德行の助けを、斯氏より得たればなり、その容氏に

與ふる書に曰く、余の信任するところ、獨り足下の心あるのみ、足下の余を感化すること、實に深しといふべし、零細の行事に於ては、他人より稗補を得たるもの多しと雖も、志意の基礎を創め、品行の根本を立つるに至りては、獨り足下の力に賴れり、」多克未爾、またその妻馬利よりして、己れの志意を保存し、學問を成就することの助けを得たることを招認せりその說に思へらく、心志高潔なる婦人は、その夫の品行をして、自ら貴からしめ、性質卑汚なるものは、必ずその夫を化して、自ら賤しからしむるものなり、と云へり、

（三十四）人は自己の身を以て第一の幇手となすべし

人の品行は、無數の精美なる事物に由りて、感化陶甄せらるゝことなり、即ち或は古人の儀範及び格言により、或は吾が身の遭際により、或は今日の世上により、或は祖宗の遺すところの嘉言善行に由りて、陶養成せらるゝことなり、」蓋しこれ等の感化の力、誠に大なりと雖も、然れども、人々自己の福祉、及び自己の德行は、皆な身自ら主宰となり、勤めて做すことによりて得ることなり、故に智者仁人となれるもの、他人の助けを得たること多しと雖も、その主要は、その自己の身、即ち絕好の幇手たるべきこと、是れまた實に疑ひを容るべからず。

自助論第二編敍

福哉。今日西國之民也。雖ニ古，帝王ニ庸何ノ及乎。昔者。方隅自レ封。知識狹隘。今也。四海交通。學問淵博。昔者。敎化不レ明。風俗慘刻。今也。崇ニ敬神明ノ志行。庳誠。昔者。君上專レ權。民如ニ奴隸ノ。今也。人得ニ自主ヲ。共ニ謀ル公益ヲ。昔者。法敎有レ禁。强迫人心。今也。任ニ民ノ自擇ニ。王者不レ問。昔者。俗尙ニ勇悍ヲ。動生ニ仇隙ヲ。今也。人嗜ニ道藝ヲ。互篤ニ友愛ニ。昔者。商賈貿易。官府限制。今也。信ニ其自然ニ。百物亨通。昔者。工事不レ盛。貨財不レ生。今也。物料輸入。製造輸出。昔者。房屋庫小。規制不レ備。今也。華堂入レ雲。究ニ極工巧ヲ。昔者。器皿粗澁。資生有レ缺。今也。

供具精美。身心快適。昔者。盤饌烹調。唯供二土物一。今也。唐茶竺糖。朝涵夕濡。昔者。山海遼闊。跋涉艱難。今也。火車汽船。安坐行レ遠。昔者。天涯地角。夢魂難レ達。今也。電報告レ急。千里面談。昔者。街衢夜黑。蒼苔荇竊發。今也。衢燈如レ晝。轂擊肩摩。昔者。鴈魚不レ便。急難吞レ聲。今也。一束一錢。達二于四境一。昔者。貧氓傭工。得レ金輒使。今也。銀舖收管。加レ子償還。昔者。簡册奇珍。富人難レ聚。今也。書籍充溢。寒士易レ致。昔者。朝多二祕景一。野有二鸞衷一。今也。廟論巷議。日印二萬紙一。蓋溯レ今五十年之前。比之二百年之前一。則不レ翅昏明晝夜之別一矣。今日之西國。比之五十年之前一。則又有二高下

霄壤之異一矣。嗚呼。如レ此。福運。何由而致哉。得レ無レ非二教化日明一而人心嚮レ善之效一乎。雖レ然。非下有二水火之理一創二造機器一者上。則德雖レ正而用不レ利。生不レ厚矣。思此。則創造機器者之功德見焉。歲次上章敦牂。孟夏下浣。中村正直題於無所爭齋。

改正 西國立志編 原名 自助論

第二編 新機器を發明創造する人を論ず

墨爾普士曰く、貧賤の人の機器を發明し英國を利するものを除き去りたらんには、英國にて貧賤の人を利するもの幾何もなかるべし、

（一）英國の人民、職事に勉強する事

英國の人民、その風習性格、種々著しきものある中に、職業に勉強する精神あることその一なり、史册に載するもの、肩を比べ、今世に於ても、古に讓ることなし、」英國版圖内の工業昌盛にして、貨財生殖するその根元基礎は、國人にこの勉強の精神あるに由りて、建立せらるゝことなり、」英國の勢力、日に長ずることは、首として、人民に自主の權ありて、又能く勉強するの效驗なり、蓋し土地を耕す人、有用の物貨を生ずる人、機器を創造する人、書

籍を著す人等、或は手を以て、或は心を以て、勉強勞苦するもの、古より今に至るまで積累して、偶然にかくの如く國家の勢力をして盛大ならしめたり、且つこの勉強する精神は、獨り邦國の生命の根源なるのみならず、昔より、次第に吾が國の律法の紕繆を改正し、國政の缺漏を補完することも、亦これに賴れることなり、

（二）勞苦の工場は、「學校の最も善きもの、」と稱すべし

勞苦の職業を勉め做すことは、最も善き教養なり、蓋し人民の各自一身をもつて言へば、職業を勉強することは、身體をして、强壯ならしむるの益あり、而して邦國より言へば、財を生じ、用を利し、經濟の大道に於て、これより上なるはなし、且つ人には各その職分ありて、力を盡すべきことなるに、この正經の工事を勉强勞作することは、乃ち己れの本分を盡す道なり、これ乃ち皇天の庇護を受け、福運を招く道なり、詩人の言に、神明の人を洞天福地に導けるや、その道路に、勉强勞苦の關隘を置けり、と云へること宜なるかな、」誠や吾れの手足を勞し、心志を苦しめて、贏得たる食物なれば、これを旨しと思ふこと、他に比類あるべからず、」抑も、勉强勞苦の德たるや、土地、これに由りて、次第に開闢し、人民、これに由りて蠻荒野鄙の俗を免るゝことなり、邦國に於て、開化文明といへるものも、特に人民の勉强勞苦に由りて、こゝに至れることなり、」且つ勉强勞苦は、獨り人の盡すべきの職分なるのみならず、また人の消受すべきの福慶なり、特に懶惰の人のみ、これを以て苦患と思へり、」試みに勞事を務むる人を觀よ、その筋骨の堅き、神思の强きは、豈にその職分を盡すの明證ならずや、かくの如く身心康强にして、工事に勞苦すること、豈に快適の事ならずや、蓋し勞苦は即ち學校なり、この學校に於て教ふるところのものは、人をして工事習鍊の上よりして、心智を開き、考察を長ぜしむることなり、是の故に、勞事を勉め、工役を執りて、その生涯を爲せる間に、心靈の修養も自らその中に具はれることなり、

（三）＊休・彌爾列爾、工事錬習の益を論ず

休・彌爾列爾は、工作の事に勉强勞苦せる人にして、その中の甘苦を熟知せること、他人の能く及ぶところに非ず、嘗て自らその平生の實驗に由りて自得せるものを言つて曰く、工事

＊ Hugh Miller. 彌氏、享和二年生

を勤めて做すことは、縱ひ極めて勞苦の業たりとも、中に無量の樂趣充滿するものにして、又自らその身を進修する所以の具なり、」又曰く、工事を勤むることは、即ち良師の最も善きものに値るべく、而して勞苦の作場は、即ち學校にして、上帝道の學校を除くの外、諸學校、これに比すべき、貴きものあるべからず、何にとなれば、勞苦の工場に於て、有用の才能を得べく、人の助けを假らざる志氣を生ずべく、恆久に耐へて倦まざることも、これに因りて慣習となり、精力自ら生長することなり、」彌爾列爾、就中、器械を以て操作し練習することを重んじて曰く、余嘗て毎日工事を反覆操習することに由りて、考思の才を生じ、眞實の經驗を得たり、抑も余が生涯の旅程を自立して進み行くことを得たるは、工事の學習に賴ること最も多かりしなり、

（四）英國の富強は、至貧至賤の人の力に賴る

前編に、既に工事を操作せる種類より起れる人の姓名を開列したり、これ等の人、或は學術を以て、或は文藝を以て、或は貿易を以て、卓然として大名を成したることの事跡を觀るときは、世間に踰越すべからざる艱難の事なきことを信ずべし、或は極貧に迫り、或は極苦を受くと雖も、人の進路は、これ等の爲に、妨礙せられぬことなり、」吾が國の人民、新發明の事、即ち奇妙便利の機器を製し出して、邦國の爲に財貨を生じ、勢力を增すこと、至りて大なりと云ふべし、然るに、奇器新法を發明するものは、大抵至貧至賤の人なり、故に吾が國の富强は、至貧至賤の人の力に賴ることなり、若し此等貧賤の人の、英國を利するものを除きたらんには、其他人民の英國の爲に成就せるもの、幾何もあらざるべし、

（五）機器創造者の、邦國を利する事

新巧の機器を發明する人あるに由りて、世界上の工業をして、活潑盛大ならしめたり、」これ等の人の智思を運らし、勞事を忍べるに由りて、民生必需の器用、及び便利快適の具、容易に造り出され、天下の人、これに由りて、安樂康寧の福を消受することを得たり、」試みに思へ、吾等の飲食衣服、家中の什物を始めとして、玻璃の室中に光を納れ、寒氣を外に鎖すもの、徃氣の街衢を照すもの、蒸氣行動機器の水程陸路ともに人物を輸將せるもの、需用の什

物並ひに耳目を怡ばしめ、身體に適する具を造り出せる機械に至るまで、何に由りてこれを得たるや、これ皆な許多の人の勉力智思に由りて、現出せる結果効驗なり、」蓋しかくの如き創造者あるに由りて、民生各箇の福利、並びに邦國一般の文運、日々に增盛することなり、

（六）蒸氣機器の創造の事

蒸氣機器は、機器の王なり、この發明創造は、近世の事と雖も、然れどもこれを作らんと思ひ起せし人は、數百年前よりして、既にこれありしなり、」其他の機器と同じく、一人一世の間に成就せるにはあらず、前人の勉強勞苦して得るところのものを、後人これに繼ぎて、また勉強勞苦して、工夫を下し、かくの如く、次第に層級を進め、數世の久しきを經て、方に成就せるものなり、蓋し前人の未だ工夫を成就せざるときに當りては、たゞ無用の長物に似たり、然れども後人これに本づきて、有用の機器を造り出したれば、功なしと云ふべからず、」紀元前百二十年の比に、亞力山德里亞に、布洛と云へる算學及び氣學水學に明かなる人ありて、始めて蒸氣の力を經驗する器具を製せしが、その考思の理、永く世に存すること、

* James Watt.　瓦德、蘇格蘭人、元文元年生、文政二年歿、

怡も埃及の木乃伊り乾かしてその腐敗を防ぐるものなり の手中に藏れたる麥粒よりして、再び枝葉を萠生するが如く、近世學術昌盛の時に至りて、古人看出せる一隙の光りより、遂にその全體の明を顯はせり、」然りといへども、蒸氣機器は、たゞ空理を論ずるのみにして、工人の慣習せる手を以て、運用するに非ざれば、更にその益あるべからず、而してこれを創造する人の至難至艱の事を忍び、勇毅にして沮まず、勞苦して倦まず、恰も勇夫の勁敵と戰ひて、遂にこれに勝てるが如き、種々の美談ありと雖も、この機器の巧妙にて驚くべきことに於ては、殆ど言語に絕したり、實にこの機器は、「人に存する自ら助くる勢力の紀功碑」と稱すべし、この碑を圍繞する人は、薩伐禮、生國民、薩は火器を運用する人、牛は打鐵匠、高禮、勃的爾、斯彌敦、惹迷士・瓦德なり、斯は量地官、瓦は算器を製する工人なりしなり、高は玻瓈の鑲工、勃は、築作の事に給する小斷、

（七）惹迷士・瓦德の勤勉、幷びにその心思を用ひて習慣となれる事

* 瓦德は、最も勉強勞苦せる人と稱すべし、その生平の行跡を觀るときは、絕大の事を成し、

絶高の功を收むるものは、天資、大氣力あり大才思ある人には非ずして、絶大の勉強を以て、極細の工夫を下し、慣習經驗によりて、技巧の知識を長ずる人にあることを知るべきなり、」この時に當り、瓦德より勝れて知見の廣き人は、數多ありしかども、勉強を居恒の習ひとして、凡そその知るところのものを、有用の實物練習に運轉すること、瓦德の如きものは、一人もなかりけり、」就中その心志、尤も恒久忍耐にして、眞證實驗を求むることを以て務めとし、又常に勤めて心思を用ふることを習ひ養へり、義地活土の說に、「人々才智の齊しからざるは、大抵は心思を用ふることを、幼時より習ひ養ふと、習ひ養はざるとに關係することなり、」と云へるは、確論と爲すべし、

（八）瓦德、蒸氣機器を作る事

瓦德、幼年の時、戲玩の具を作ることに巧みなりけり、」その父は木工にして、その舖に象限儀ありけるが、これに因りて視物學及び天學の門戶に導かれたり、その身、多病なりしが、これに因りて生物體質の學或は生命の理學と譯す に心を留め、その深奧に達せり、又常に野外に徜徉歩しけるが、これを時として草木の學に意を用ひたり、」算術の器を作りて、家業となしたる時、大風琴を建ることを、或人より托せられたりければ、これより始めて音韻を調和することを學び、遂に善くこれを造れり、額拉斯哥の學堂に牛國民の作れる蒸氣機器の小き樣子を藏してありしが、これを修復すべしとて、瓦德に托せられたりければ、瓦德これに因りて、前人已に發明せる所の熱の作用、及び蒸氣の漲開し收縮する所以の理を講究し、又同時に機器建造の法を研究し、困苦勉強、久しうして怠らざりしが、つひに縮密蒸氣機器と云へるものを造り出だせるまで、許多の星霜を經たり、その間、成就すべき望みも必ずしがたく、また明友の徵憑するものも、少なかりしが、瓦德は更に工夫を怠らざりけり、然れども、それが中に、家人を養ふために、象限儀を造りてこれを賣り、紘弓簫管、及び其他樂器を作り、堀水の工事を測量し、道路の修造を監視し、水道の築作を掌理し、これ等の事を爲し、正經の利を得て生活を營みけり、」久しうして後、一箇の良友馬寶・葡爾敦なるものを得たり、また工事の帥首たる俊傑の士にして、巧思あり精力ありて、遠大の見識ある人なり、」瓦德の縮密機器を用ひて人力に代へ、諸般の工事を爲さんことを企

て、遂に能くその志を成したりけり。

（九）蒸氣機器、百般の用となる事

許多の智巧ある人、相繼いで世に出で、工夫を用ひ、この機器を改變し、益々巧妙を極め、便利を盡くし、遂に百般の工作場に於て、必用にして缺くべからざるものと成るに至れり、或はこれを用ひて器械を轉動し、或は船船を推し進め、或は百穀を粉末にし、或は書籍を印刷し、或は金錢を製造し、或は鐵を鎚鍛し、削平にし、其他凡そ力を要すべきものは、一としてこれを以てその用に代へざるものなし、」就中最も有用なる改變を爲せしは、托列未集と、士堤反孫父子の力に賴れり、即ち方今蒸氣車に用ふる行動蒸氣機器と云へるものは、托氏の思想に始まりて、士民の功力に成れり、これよりして、邦國の景象、丕然として一變し民生の便利、限りなく、世道人心大いに上進することを得たり、

（十）＊力査・阿克來幷びに紡棉機

瓦德の新機を用ひて、各般の工事場、益々繁盛なりけるが、その最初に顯はるゝものは、紡棉工場なり、」この工事の基を建てたる人を、力査・阿克來と云ふ、その人となり、巧思創造の才あるのみならず、その實事を試むるに、精力あり、知識あること、尤も庸衆に超えたり、阿克來、創造者の稱を得たりしが、その始めに當りて、頗る異論を受けたり、蓋し阿克來の紡棉機に於ける、恰も瓦德の蒸氣縮密機器に於ける、士堤反孫の行動機器に於けるが如く、俱に皆な前人を祖述したれども、新大發明を爲したり、譬へば、前人の才思は糸の散亂せるもの、如し、三子は悉くこれを集め、己れの籌謀に從つて、新たにこれを織るものなり、その創造者の名を受くること、宜ならずや、」阿克來より三十年前に、保爾と云へるもの、圓轉木を用ひて糸を紡することを發明し、公許を得たりしが、この機器未だ實用に供するに足らず、海士と云へる人、紡糸器を造りしが、また成効あらざりしなり、凡そ工作場にて、蒸氣機器、礦中提燈、電氣通標の如き新發明あらんことを、世人望むときは、巧思ある人、その需めに應ぜんと欲し、各々心を竭し精を勞して、これを造り出さんことを競ひけるが、後に及びて、卓絶の才ありて、實事練習の學ある人、遂にその功績を成就せり、其他圖謀して

＊ Richard Arkwright.
＊ Richard Arkwright and Samuel Crompton.

功なきもの、盡く望みを失ひ、創造者を誘讀するに由り、瓦德、土堤反孫、阿克來の如き人、其聲名を存し、創造者該受の權を保たんと欲して、之を防がざる事を得ざりしなり、

阿克來は、一千七百三十二年七年享保十に普列斯敦英國地名に生る、その父母は、甚だ貧しうして、子十三人ありしその末子なり、童子の時に剃頭店に送られ、その業を學び得て、のちに薄爾敦に赴き、一處の地窖室に住し、その上に表號を出して、「地下に剃頭者あり、その價ひ一便尼」英國銅錢の名と書きたり、他の剃頭店にて、またその價ひを同じうしければ、阿克來また「半便尼にて剃頭すべし、」と表號を改めたり、數年の後、その地窖室を去りて、髮毛を賣買する行賈となる、此の時に當り、假髮を著くる風俗、未だ廢れずして、假髮を作ることは、剃頭人の利を得る業なりしなり、蘭加舍は工場熾盛にして、少婦集まりて傭工をなすの處なれば、常にその間に往來し、その垂髮を整理しけり、また製煉法を以て、毛を染むることに巧みなるがゆゑ、これを商ひて利を得たり、既にして假髮を著くる風俗變じければ、阿克來、紡棉機を製せんと思ひ、手を下し始めたり、元來、職業の餘暇を以て、自動の機器を造り出さんと、これに心を用ひたるが故に、これよりして、紡棉機に移るは、頗る易き理あり、これより勤苦して工夫を用ひ經驗を爲し、遂に衣食の業を怠忽にして、錢財をも使ひ盡くして赤貧に至れり、その妻、その夫の勞して功なく、徒に財と時とを費すことを見て、懊惱に堪へず、一日怒りに乘じ、機器の樣子を破碎しければ、阿克來大に怒り、その婦を逐ひたりけり、

阿克來、嘗て客耶と云へる人と知音を結びけり、即ち話林敦の時辰標匠なり、阿克來、自動機器の中、その一分は客耶より啓發の助けを得たりと云ふ、或は思へらく、阿克來、圓軸を以て糸を紡するの理を、客耶より學びたりと、又或は云く、偶々鐵の燒けて紅色となるもの、鐵の圓軸の間を通行して伸びたるを熟視し、これに由りて、この理を悟れりと、かく傳ふるところ區々なり、然れども阿克來一たびその欄柄を得てより、工夫を續ぎ、次序を積み、遂にこれを成就せり、こゝに至りては、客耶の能く助くるところにあらず、

阿克來、その婦を去りてより、全く己れの家業を輟めて、專ら心力を機器に用ひ、客耶に托して作りし法子は、普列斯敦の學校に置きたり、阿克來は縣邑の民なれば、民委官を選ぶの期にあたり、その會に赴くべきに、衣服襤褸にして、出でがたかりし故、衆人これが爲

*Kay, a clockmaker of Warrinton.

Do to others as you would have others do to you.
Do to others as you would have
others Maruzen Ink
Maruzen Ink. Maruzen Ink

† Nottingham.　* Hargreaves.

に金錢を醵し、これに資給してけり、その貧困かくの如くなりしなり、」抑も普列斯敦は手工を以て衣食する人民多く住しける故、もし阿克來の機器成就したらんには、己れ等業を失ひぬらんと、恐れ思ふよりして、學校の邊に聚りて、囂然として罵り譟ぎけり、阿克來心に思ふには、前年客耶新に飛梭を作りしとき、群衆亂譟して、客耶を蘭加舍より逐ひ出だせり、厚額理武士は、その紡棉機器を造りしとき、人民騷亂して、その器を毀ち、之を粉齏にせり、されば我も今またこゝに留まるべからずと、遂にその法子を包裹して、諾丁舍に赴きけり、」

この地の銀行商に、金を出し阿克來を助くるものあり、鄉紳來的と云へるもの、また給するに金を以てし、皆なこの器成就の日に至り、共にその利を分たんと欲せり、」然るにこの諸人豫め料りし如く、速かに成就せざりければ、銀行商、阿克來に勸め、鄉紳斯士拉的及び尼德に助けを求めしめたり、斯德拉的は、織襪機を製し、免狀を有てるものなるが、一見して阿克來の機器の必用有益なることを賞贊し、自らその夥計に入りければ、これよりして後、阿克來享通の路開けにけり、一千七百六十九年明和六年遂に免狀を得て、其機器の利を己れに保護せらる、即ち瓦德の蒸氣機器の免狀を得たる年なり、奇なるかな、始めて諾丁舍に棉麻を

造り、馬力を以て曳かしめたり、その後、大伯舍に建てるものは、その規制更に大にして、水車を以て運轉せしめり、この故に紡棉機器を水機と呼びたり、

阿克來、既に勉強勞苦して、その機器を用ふるに至りけれども、その詳細曲折に至りては、猶ほ完全なかりけり、蓋しその機器、大段は成就したれども、その詳細曲折に至りては、猶ほ完全ならず、故に多年の間、心力を用ひ、改造を事とし、勞苦の久しきに耐へ、許多の錢財を費して、遂に利便を盡くし、靈巧を極むるに至れり、」既にして阿克來の機器盛んに用ひらるべしと見えければ、蘭加舍の手工を以て衣食する者、騷然として嘯聚し、阿克來の免狀を扯裂せんと企てたり、恰も高奴瓦の礦人、蒲爾敦、瓦德をして、機器の利を奪はしめんと欲し、爭端を起せし時の如くなりき、しかのみならず、阿克來を宣言して、工人の仇敵となし、蘭加舍の工場に亂れ入り、その機器を悉く破碎せりざりけり、蘭加舍の商人、阿克來の製する物を買ふことを肯ぜず、且つその機器を用ふるも、巡吏、兵士の力にても、これを防ぐに足らのも、創造者に償ふべき利銀を償ふことを肯ぜずして、徒黨を結び、法廳に訟へ、免狀を奪はしめたり、心ある人は、阿克來の爲に羂に憤りしなり、この訟事終りたる比、原告人の

旅寓せる客舍前を、阿克來過ぎたれば、その中一人、大聲にて言ひけるは、好し、我等老朽の剃頭者を困極に至らしめたりと、之を聞きて、阿克來、我れなほ一剃刀を持てり、汝等を悉く剃するに足れりと答へたり、」然れども、その後、阿克來新たに蘭加舍、大伯舍、牛拉拿古に紡棉工場を建てたり、大伯舍の舊工場も、斯土拉的死して後、全く阿克來の所有となれり、その出だせる者、多くして且つ善かりし故、その賣買の權、自らこれに歸し、物料の價も阿克來に由りて定められ、その他紡棉の工人、これが管轄に歸するに至れり、

阿克來は、天性勇毅にして、又世務に應ずるの才あり、その處々に工場を建てし時に當り、或は曉四時より、夜九時に至るまで、勉勞して休まざりけり、」五十歲の時、始めて英國文法を學び、能くこれに通ずるに至れり、」阿克來、聲名日に顯れたれば、命ぜられて大伯舍の知府となる、即ち最初の機器を作りし時より十八年なり、又その後幾ばくもなく、英王若爾日第三より、賞典として奈的の爵を贈らる、阿克來、一千七百九十二年寬政歿せり、その紡棉工場の邦國の爲に財貨を生ずること、勝げて數ふべからず、而して阿克來は、その開基の人なれば、その功萬世に泯ぶべからず、

その他、英國に於て工業を興して、その住するところの四鄰を富饒にして、邦國の爲に勢力財貨を生ずる人少からず、その勇敢強有力に由りて、大業を成就すること、皆な後世の法則たるべし、白爾巴の斯土拉的氏、額拉斯哥の典南的氏、李圖の馬赫爾氏、及び額托氏、南蘭加舍の比爾氏、亞斯窩士氏、倍禮氏、非爾田氏、亞斯敦氏、黑烏德氏、燕斯窩士氏の如き、皆な是れなり、就中、比爾の族、尤もその傑出せしものなり、

（十一）比爾幷びに印花機を印する白布の上に花草

比爾の族、その元祖と稱せらるゝものは、凡そ千七百五十年寬延三年前後に、伯拉訖畔に住する小農にして、羅伯・比爾といへるものなり、比爾、その子女の膝下を繞るもの多く有りて、稼穡のみにては、生活するに足らざりければ、農隙の時には、家人を率ゐて布を織り、これを商ふことを始めたりけり、抑も伯拉訖畔は、織工の家多くして、この地より出だせる布疋は、麻を緯とし、棉を經とせる伯拉訖畔原色布と稱せらるゝものにして、農民の勉強なるものは、この布を織りたりけり、比爾は正直なる人にして、その織れるもの、また精造なりけ

れば、これを買ふもの日に多く、且つ儉省にして勉強なりければ、家道興旺に赴きたり、ビール爾また險を冒して敢て爲すの氣象あり、この時棉麻を振刷する圓筒器を、新たに造れるものありけるが、世人未だこれを用ひざりしに、ビール爾始めてこれを用ひたり、

是の時に當りて、洋布に花草を印するの術、未だ世に知られざりければ、ビール爾、首として心をこれに注ぎ、洋布の上に畫を印出すべき機器を、造り出さんと欲したり、その比の俗に、ビール比爾の如き家にては、ビューターアと云ふ錫鉛を交へ製する碟を用ひたり、或時ビール比爾、ビューターアの上に圖形を畫して、思ふには、これを押したらんには、反對せる圖形を布上に印出すべしと、偶々村落に住する農婦の家に、カレンテリング　マシーンを藏せるものありければ、ビール比爾は因りてその家に往き、碟の上の圖形を畫せし處に色料を摩擦し、その上に白布を被らしめ、この機器上に加へしが、果して其圖を分明に印出したり、これその印花機器を造り出だせる原始なり、その機器成就するに及んで、始めて印するところの布は、芹葉の文なりしゆゑ、鄰近にて、ビール比爾を、「バースレイ　ビール」と喚びたり、」この機器は木圓筒の面に、圖形を凸出するものと、銅圓筒に同じき圖形を鋸雕せるものと、合布を押して、平滑光澤らしむる圓筒形をなせる器なり、

湊して成れるものなりしが、その子、のち更に能く完全に至らしめたり、」ビール爾その工事益々利ありければ、遂に農業を止めて專ら布疋を印することを務めとせり、その兒子輩生長するに及んで、その父に似て勉強なりければ、父を役使しければ、四鄰の貧民これに歸し、衣食の原と仰ぎけり、

この上に著すものを觀るときには、元祖のビール伯・ビール爾、嘗てその父を稱して曰く、吾が父は、實に我家を創めし人なり、貿易の邦國に財を生ずることを深く知り、常に言ひけるは、「貿易賣買の事は、人民各箇の利となり、また邦國一體の利となることなり、然るに比較して見るときは、邦國一體の益となること多し、」といへり、

羅伯・ビール爾は、第二世の製造者にして、始めて巴洛涅的の爵〔男爵に亞げる者〕を得たるものなり、才能ありて、且つ勉強なること、その父に彷彿せり、始め身を起せる境界に於て、尋常卑賤の者と、大なる逕庭なかりき、何にとなれば、その父厚産の基を立てし人なれども、本錢の不足より起れる困難の事多かりし故に、ビール爾二十歳の時、早くも己れの本資を以て印

花の業を始めんと志したり、その伯哈活士及び伯拉訖畔の人耶逸と云へるもの、比爾と共にこの業を爲さんとて、各人本錢を出だし合せ、僅に五百ポンドステルリングを得たり、」比爾は、年少かけれども、この業は素より習ひ知れり、且つ老人の頭を少年の肩に載せたるものと、人にいはるゝほど、百事に老成せり、近處に間地ありければ、廉價を以て買ひ得て、こゝに小屋を構へ、印花の業を始めしが、その後に、また棉花を紡する業をも兼ねて爲せり、始めの程は貧陋なりしが、次第に繁昌し、獨りその居所を潤すのみならず、またその近鄰に至るまで、この工事を移し、規模悉く廣大なり、比爾、耶逸、その製造せる物を、十分に完美ならしめんことを欲し、又その役使する工人の利益あらんことを謀り、安穩に過活せしめんことを欲す、故に二人、この業を始めて、未だ昌盛ならざる時といへども、工人に豐値を償ひしと言ひ傳へけり、」比爾常に新機器を發明することは、一世の利益となることなりと、」深くこれを重んじたり、されば、自己も印花の術を、益々精善に至らしめんと欲し、多年の間、心力を勞したりしかば、後にはその布色の美澤なる、花葉の文の妍麗なる、英國工場中に於て、これに及ぶものなければ、居然として第一等の稱を得たりけり、

* William Lee.

其他、機器を創造せる人に、維廉・李あり、織襪機を作れり、いづれも皆な巧思あり、勉強して倦まざるの人なり、これによりて、工人傭銀を得て衣食するもの、諾丁舍及び近鄰に充牣せり、

（十二）* 維廉・李幷びに織襪機

李は、一千五百六十三年永祿六年に烏德拔剌に生る、始めは堪比日の學院に入り、法教の學を修め、加爾華敦の牧師法敎の官となれり、その織襪機を作らんと思ひ起せし所以は、傳へ云ふ、李嘗て村中の少女を見て、深く戀愛し、その家に往きたるに、少女常に襪を織り、李を待遇すること、簡慢なりければ、李忽ち憎怨の心を生じ、いでや新機器を造り、彼れの手工をして、利を失はしめんものをと、三年の間、織襪機を作ることに、心力を勞したり、その機器成就しければ、李は、牧師の職を止めて、この工業を始め、その兄弟親戚に教へ、數年の間こゝに住居したり、」既にして李は、この機器を益〻修改し、工巧を究極しければ、これを女王以利沙伯に呈覽し、その恩顧を受けんと思ひ、倫敦に赴き、女王に謁見するを許され、その前

に於て、機器を運用しけるに、女王以爲く、この機器行はれなば、貧人手工の利を失ふべしと、因りて一語の奬賞もなかりけり、」李、大いに失望し、心に思へらく、女王、吾が織襪機を貌忽して顧みざれば、其他に賜顧の人あるべからずと、偶〻法國有名の宰輔索爾例、路因に於て、織襪機を開かんことを欲し、李を招きけり、李これに由りて、その弟惹迷士、幷びに工人七名を具し、路因に往きければ、果して法國の王顯理第四の保護を得て、盛んに襪を織り出しけり、然るに不幸にして、法王、人に弑せられ、その職業頓に衰へければ、再びその志を達せんと欲し、巴理に赴き、知己を求めしが、李は新教を奉ずるの人、且つ外邦人なるが故に、絕えて顧みる人もなく、極貧に迫り愁苦を積み、幾何もなく歿せり、李の弟惹迷士、因りて英國に逃れ歸り、素洛敦に於て、工場を設け、機器を用ひ、襪子を織り出しけるが、これより英國各所に播傳し、遂に邦國工事の緊要なるものとなるに至れり、

（十三）戎・喜斯可的幷びに織二線帶一機

*John Heathcoat.

用ふるものなり

喜斯可的は、一千七百八十四年天明四年に生る、禮斯土舍の小農の子なり、」鄉塾に入りて、讀書作文を學びけるが、幾何もなく、機架を作る工人の家に學弟となりけり、この時、喜斯可的、童子なりしが、巧みに匠具を使ひ運らし、また織襪機の委曲に通じ、また經糸を理する機關の錯綜せるものを了解し、暇あれば、この機器を修補せんと欲し、心を用ひけり、十六歲の時、すでに博金含レース及び法蘭西レースの如き、上好のレースを織る機器を造り出さんと思ひ立ちたり、蓋しこの時、手を以て織りたるが故なり、されば、喜斯可的、織襪機より轉化して、織二線帶一機を造らんと欲し、始めて經糸を理する架子を修改し、これによりて、レースに似たるミツテン一種手套の一種を造り出だしければ、益〻自ら勸勵發奮し、これを成就せんとて、工夫を下しけり、そも〳〵織襪機は、往年既に人ありて、これを補改して、線帶を織ることに用ひけるが、そのレースの目は、襪の如く糸を交互して重ねたるゆゑ、薄弱にして未だ完全ならざりしなり、この故に、諾丁含に住する工人の輩、網の如くに糸を編みたる線帶を織る器械を作らんと欲し、工夫を用ふるもありけるが、或は成就せずして死し、或は狂病を發して、その地を逐はれ、皆なその志を達せざるがゆゑに、舊法の機器、なほ應用の物

となり居たり、」喜斯可的、二十一歳を踰えたるとき、婦を娶りければ、諾丁含に赴き、工食の家を求めて、過活したるその間に、網の如くに糸を編み結びたる線帶を織る機器を發明せんと欲し、心肝を碎きけり、これにより、始めに博金含レースと名くる上等の品を、手を以て織ることを習ひける、何にとなれば、手を用ふる運動の情狀を會得せざれば、手の如き運動を爲す器械は、造り出だしがたしと思ひし故なり、其他種々に工夫を用ひ、多少の經驗を積み、久しきを經て倦まず、難きに逢ふて屈沮せず、屢々功を誤れども撓まずして、却つてこれを以て屢々解悟を發するの助けとなせり、且つその工夫を爲せる間、後來必ず成就の時あることを確信して、困勉の功を積みけり、其人となり、言語簡默にして、淡薄を以て自ら奉ぜしと云へり、その妻、常にその夫の志業の成るを望み、久しくその夫に代りて憂慮したりけり、喜斯可的、この機器を發明せんことを務めたる間に、貧苦に迫り、傭工を作して口を糊すること、屢々なり、多年の後、許多の難きに勝ち過ぎて、殆ど成就に至りぬべき比なりし、或る土曜日の夜、その妻、その夫の顔を見つゝ、「いかに戎、その夫の機器は用ひらるゝやうに成り候ふや、」と問ひければ、喜斯可的答へて、「否、安、その婦の名を喚びて我れ又再び改め作らばやと思ふなり、」といへば、その妻、流るゝ涙を押へ得ず、聲を出して潸然と泣けり、其後數十日を過ぎて、喜斯可的、欣然自得の色ありて、狹き一條のボッビンネット　網の目の如く編みたるレース　を持ち歸りて、これをその婦の手中に置きけり、これ即ちその機器成就して、始めてこれにて織りしものなり、抑も織ニ線帶一機は、その製作、甚だ紛糾錯綜したるものなれば、言語を以てこれを狀どり難し、實にレースを織る婦人の手指を以て、レースの目を開き、或は結べる運動と、少くも異なることなく、これに擬へ作れる機關なり、

凡そ新機器を創造する人は、專賣の免許を受くることなるが、その免許を受くるときに當り、往々これを爭ひ妨ぐるもの出來て、創造者にあらずと誣告せらるゝ、その例少からず、喜斯可的も、亦かくの如き事に逢ひたり、線帶の工人兩名、陰に相謀り、互ひに創造者なりと稱し、爭ひ訟へて、喜斯可的の免狀を奪はんと欲するものありけり、喜斯可的、自らこれを伸理せんと欲し、公廳に訴へんとせり、格不例、〔後に勞爾德・林德忽爾斯的〕は、喜氏の托するところの狀師なり、その供詞を覽畢りて曰く、我れ今子の爲に、この案を伸理することを能はず、何にとなれば、我れこの機器の運用を諳んぜず、その曲直を明辨すること能はず、

* Sir John Copley. (Lord Lyndhurst.)

されば、我れ直ちに工場に至り、この機器に通曉して、然る後に、力を盡して子の訟案を伸理すべしとて、遂にその夜、信船に乘りて、諾丁含に下りけり、其次早、格不例、織ニ線帶一機器の中に身を置き、レースを織ることを學びけるが、既にして、巧みにボッビンネット レースを織ることを得、且つ機器の理、幷びに其委曲に通曉するを得たり、さて、陪審聽訟の期至りければ、格不例は喜斯可的を伸理せんがため、その機器の法子を把りて、これを容易に運轉し、これを發明する所以の次第を明白に講解しければ、法廳に坐せる大吏よりして、陪審の人に至るまで、及びその席に聚り觀る者、驚き感ぜざるものなかりけり、これに由りて、喜斯可的、創造者なることに定まり、免狀を受くることを得たり、訟事畢りて後、喜氏、國中の機器を有てる主人より、稅銀を出さしめしが、その總數甚だ多かりけり、就中、その工人を用ひ織り出だす線帶より得るの利、尤も大にして、この機器の世に弘まることも亦速かなり、これに由りて、レースの價次第に減じ、二十五年の間に、方三尺のもの、五封度より五邊士の價に下りけり、その賣り出だせる價銀の入數、毎年四百萬〇〇〇〇封度に至る、これを以て、その役する所の工人、十五萬人に給與する工銀となしたり、

喜斯可的、千八百九年文化六年に、禮斯土舍に於て、レースを織る工業を始めけるが、數年の間に、その業益々熾盛にして、許多の工夫を役使し、その工銀、毎人一週七日に、五封度より十封度に至れり、かくの如く、人民工銀を得て衣食するもの、其數次第に多かりしが、手を以てレイスを織る工人は、その業を失はんことを恐れ、機器を有てる人家に入り、これを壞破せんと企てけり、一千八百十一年文化八年遂に徒黨を結び、白日處々の工場に入り、機器を壞りけり、抑もこの機器、その制甚だ精緻なるが故に、たゞ一槌を受くるのみにて、全體の機關、これが爲に廢して、無用の物となる、且つこの機器を用ふる工場は、多くは市井を離る る荒僻の地にありしかば、これを摧破すること、甚だ易かりしなり、就中、諾丁含、鬧亂最も甚だしく、人衆、夜中竊に會議し、隊伍を組みて、機器を破壞す、その魁首の名を拉德と云ふ、是の歲の冬、拉德の黨、その勢甚だ盛んにして、機器の壞破せらるゝもの多く、これを仰ぎて衣食するもの、皆なその業を失ひ、愁苦の狀、おほかたならず、その黨の出沒進退、甚だ密にして、蹤迹しがたく、或は兵器を携へて、約克舍、蘭加舍の工場に入り、器械を擊ち壞り、或は火を放ちけるが、後には官府より兵卒に命じ、嚴しくこれを緝捕せしかば、

其亂漸く鎭まりにけり、

喜斯可的、また拉德の禍に罹れり、一千八百十六年文化十三年の夏、一隊の群黨、婁拔剌地の工場に入り、火を放ちければ、機器三十七具、盡く燒けて灰燼となる、その損失、一萬封度に値れり、其黨十人捕へられ、八人は死刑に處せらる、喜氏、其地の居民をして、その損失を償はしめんことを求めしに、居民これを肯はず、然るに、裁訟官これを裁斷して、遂に居民より喜氏に一萬封度を償ふべきに定めらる、この時知拔敦下埠盆舍府の地名に大屋ありて、即ち昔日獸毛を治むる工場なりしが、この地、毛布の商業衰へてより、居民貧窮に至り、この大屋、人の占むるものなかりけり、喜氏これを買ひて、レースを織る工業を再び始めしが、その規模先年より廣大にして、その機器、常に運用するもの三百の多きに至れり、喜氏、また蒸氣力を、田器に用ひんと欲し、多年の間、精神をこゝに注ぎ、蒸氣犁と云へるものを造り出して、免狀を得たり、その後、厚刻爾の蒸氣犁、世に出で、これがために壓倒せらる、然れども、喜氏の時に至るまで、田器の中に、未だかくの如き便利なるものあらざりしなり、喜斯可的、天資頴敏にして、その才甚だ高く、これに加ふるに、正直にして忠厚なりし人なり、抑も正直忠厚は人の性行に於て最も尊ぶべきの大德なり、喜斯可的、獨り自ら勉學し、能く自ら師を得るものといへども、少年を勸勵し、工事の使役に供するに足らしめ、それをして、才能を生じ勢力を出さしめんと、常に心を用ひたり、一生の間、繁劇なりしかども、其餘暇を以て法蘭西語、以太利語を習學し、精しくその文法に通ずるに至れり、また學士文人の著せる絕好の文字を細心味讀し、これをその心に貯積せり、博く衆科に達して、各々精確の識ありしとなり、喜斯何的、常にその役使する工人の爲に、方法を設け、それをして安穩に過活し、及び次第に發運なさしめたり、故に二千の工人、喜斯可的を仰ぐこと、父母の如くなりき、その他窮民の來りて救助を乞ふものあれば、必ず厚くこれに賑給せり、嘗て六千封度を出し、學校を建て、工人の兒子をして、其中に於て童子業を學ばしめたり、喜斯可的また天性和易にして快活の人なり、故に貴賤貧富を問はず、凡そ之と接する人は、必ず喜斯可的を親愛したりとなり、

一千八百三十一年天保知拔敦府にて、民委官を選びけるが、衆論、喜斯可的に屬したり、巴力門下院に入り、その任に居ること、凡そ三十年、その間、勞爾德爵名巴爾麥斯敦と、尤も志

氣投合せり、巴、甚だ喜斯可的を重んじ、これを稱して畏友となしたり、一千八百五十九年、安政六年衰老を以て職任を解き、鄉里に歸り、其後、優游として時日を送りしが、僅かに二年にして、その齡七十七にして歿せり、

（十四）若爪德幷びに織機

若爪德の履歷は、甚だ喜斯可的と異にして、しかも其名甚だ高く、その數甚だ奇なり、その生平を觀るときは、その身極めて卑賤なりといへども、智思才能ある人は、闔國の視傚するところと爲り、人民の工事を勸め世に大功德あることを知るべし、若爪德は立翁士の人なり、其父母貧しうして、之をして師に就て學ばしむること能はず、少しく長ずるに及んで、これを釘書匠の家に送り、これが徒弟とせり、その家に年老いたる書辨のありけるが、若爪德に算術を敎へたりしに、幾何もなくして漸く器學に進みけり、老書辨、因りて若爪德の父に、その子の才思に應じたる職業に、改めしめんことを勸めければ、これよりして、利器匠の家に送られ、又轉じて鑄字匠の業を爲したり、」既にして、その父母、ともに世を辭しければ、

* Jacquard.

若爪德、その父の遺せし織機を用ひて、布疋を織り生活を營みけり、然るに織機の製、未だその心に滿たざれば、己れの新意を出し、これを改造せんと欲して、一心に工夫を用ひたり、遂にこれが爲に、その職業を廢棄して、貧苦の境に迫り、織機を賣つて借錢を償ひしが、後には居宅をも賣りて、債主に賠ふに至れり、こゝに於て、若爪德、他人の家に給事せんことを求めしが、時人おもへらく、若爪德は機器を創造せんと欲して、つひにその成功なし、畢竟懶惰なる人なりとて、これを眷顧するものなかりしが、後に伯列斯に往き、繩工の家に給事し、その妻は立翁士に留まりて、草帽を造り、僅かにその口を糊してぞ居たりける、若爪德の事跡、その後、絕えて知るべからざりしが、幾許の年を經て、その花紬を織る機器を改造し、その功を竟へたり、蓋しこれより以前は、織機の上にて、經糸を引くには、人力を要したりしが、この機器出でてより、人工を用ふるには及ばざりしなり、この機器次第に行はれ、十年の後には、立翁士に於て用ふる機器の數、四百あるに至れり、

然るに法蘭西に變亂の事起り、若爪德の職業、これが爲に妨礙せられたり、一千七百九十二年に、若爪德は、立翁士の義兵隊中に入り、徒部・古蘭西の兵と戰ひしが、つひに敗走して、

列印の軍に赴き、その隊中に入りけるが、やがて軍吏に升されたり、既にして、或る日の戰ひに、その子、炮丸に中り、己れの側に死しければ、竊かに軍を逃れて、立翁士に歸り、その妻を尋ねしに、その妻、この時なほ草帽を造りてぞ居たりける、因りてその妻と偕に隱れて住しけるが、若瓜德、昔年の癖好、再び作り、前功を繼ぎ、更に新見を出し、機器を造らんと思へども、これを爲すべき術もなければ、いでや潛居の所より出で、職事ある家に服役せんものをと、遂に一の工人の家に給事してけり、晝間は工事を執るに忙しかりしかども、夜中は己れの志すところのものに工夫を下したり、或る日偶〻その主人に向ひ、己れ花紬を織る機器を改正せんと欲すれども、不幸にして窮苦の爲に妨げられ、その志願を達することを能はざることを嘆じ語りければ、その主人大いにその志を賞し、若干の金を與へて、新功を企つる費用となさしめたり、

其後、三箇月を閱して、若瓜德その功を成就したり、これによりて、是迄煩數の手工を經て製するものを、機關を以て織ることを得たり、一千八百零一年享和元年巴理に於て、展觀場を開き、百工機器を集めしときに、若瓜德の織機、また其中に陳ねられしが、その賞として、記事扁圓を賜はる、その明年、倫敦の術藝會社にて、賞を懸けて、魚網及び船用の網を織る機器を造り出す者を募りしかば、若瓜德これを造らんと欲し、工夫を下しけるが、僅かに三週七日の間にこれを成就したり、

若瓜德、機巧に長ずるの名、次第に高かりければ、知府或る日これを招き、その機器を運用するの談話を聽きけるが、遂にこれを恩伯臘我が國にて皇帝といふがごとしに薦聞せり、遂に命ありて若瓜德その機器を持して、巴理に赴むき、恩伯臘の前に於て講談すること、凡そ二時間許なり、これよりして、術藝機器守藏館の中に居處を備へ、こゝをその工場となさしめ、俸祿を給せられければ、若瓜德益々其織機を完全巧妙ならしめんと欲し、心を悉したり、抑もこの術藝機器守藏館は、人智を極めし百般精巧の機械を藏貯せる處なれば、若瓜德この中にありて、日夜觀察するその益少からず、そが中に、尤とも若瓜德の意に中りたるは、葡岡孫の花紬を織る機關にして、葡岡孫は、自動機を造る有名の人なり、

葡岡孫は、物を造る才智あり、且つこれを嗜んで癖を成したり、古語に曰く、詩人生れたり、造られたるにあらず、と云へること、移して以て葡岡孫を評すべし、」童兒の時、其母に隨ひ、

* Vaucanson.

他人の家に至りし時、偶々自鳴鐘の搖擺するを樂しみ見けるが、數月の間、これを考思し、遂にエスケープメント〔自鳴鐘中にある一分なり、即ち動機を均整にして、その急速に轉ずるを防ぐ所以のものなり、〕の理を了解せり、」その後木を以て自鳴鐘を作りけるに、善く時に合ひたり、又小き寺觀を造り、其中に、天人は翼を搖かし、法師は種々の動作をなせり、その他、自動の機を作らんがために、解剖の法、音樂、及び工匠の術を學び、數年の星霜を經たり、或る時、チュイレリースの園中に、笛を吹く人のありしを見て、かくの如き運作を爲すものを作らんと思ひ、數年の辛苦を歷て、始めてその志を達したり、その後、籌策を吹く人を作れり、これに繼ぎて作れるものは、自動の鴨にして、その精妙、實に驚くべし、或は水に浮び、或は水を拍ち、或は水を飲み、或は鬩々の聲を發せり、次に作れるものは、毒蛇なり、クレオパトラの演戲に用ひしとき、正旦の懷に入り、嘶鳴して突出せり、」既にして、葡岡孫、命ぜられて法國の紬緞製造場に監督となり織機を修改せんことを務め、その中に絲を拋つ器械ありしかば、立翁士の工人、その職業の妨げとなるべしと、怒り思ふにより、嘗て石を以て葡岡孫に投じ、殆どその命を危くせんとせり、然れども、葡岡孫遂に花紬を織る機關を造り出せり、一千七百八十二年天明バウカンソン二年葡岡孫、

長病の後に沒す、その創造せる器械の類、悉く女王に遺物として獻じけるが、女王これに心を留めざりし故に、埋沒して世に知られざりけり、然るにその花紬を織る機關は、幸ひに術藝機器守藏館に貯へてありし故に、若瓜德これを粉本として、更に改補し、凡そ週月にして、若瓜德の織機と喚るゝものを成就するに至れり、」若瓜德、新機を以て織り出だせるものを、皇后ヂョセフィーンに獻ぜり、拿波崙、大いにこれを嘉し、良工に命じ、その樣子に倣ひ、許多の織機を作らしめ、これを恩賞として、若瓜德に賜ふ、既に立翁士に歸りければ、立翁士の工人、若瓜德を視ること仇讎の如く、哄然聚議し、新機を毀ち破らんと企てけるが、兵衆に妨げられて、其事は行ひ得ざりしが、一揆の黨にて、若瓜德の像を作り、これを縊架に揭げ、罪人と喚ばはりたり、既にして若瓜德の機關の一は、亂黨の爲に粉韲と爲され、その身は海岸に曳かれ、殆んど水中に沈められんとせしが、辛くして危難を免るゝことを得たり、

然りと雖も、若瓜德の織機の功用は、之が爲に損滅せられざりき、蓋しその行はるゝと、否らざるとは、特に時世に關係することなり、英國織造局の工人、若瓜德に勸め、英國に來

り住せんことを欲しけれども、若瓜徳は、たとひ鄉里の民に殘害を受くるとも、己れの生國を愛するの意深かりければ、その請ひに應ぜず、その後英國にて若瓜徳の機關を用ひて、布帛を織りければ、立翁士の人も、これに利を奪はれんことを恐れ、また遂にその機關を用ひたり、抑も土地の工人、始めはこの機關行はれなば、己等衣食の業を失ふべしと恐れしが、さはなくして、却つてこの機關の行はるゝに隨ひ、織造場に於て、役使する人益々增加し、一千八百三十三年天保四年立翁士織造場の工人、六萬人に及び、その後また夥しく增加せり、若瓜徳、これより後は、平安に餘年を送りしが、或る年若瓜徳の誕生日に於て、前年、若瓜徳を海岸に曳き水中に投ぜんとせし工人、もろともに若瓜徳に請ひ、この事のありし道路を通行し、その凱勝を顯はし、誕辰を祝せんことを欲しけるが、若瓜徳、固より謙退なる人なれば、かくの如きことは望ましからぬゆゑ、之を許さゞりけり、若瓜徳、六十歳にて、その父の故鄉に退き、一千八百三十四年天保五年に歿せり、之が紀念として、その像は立てられしが、その親族は貧窮なり、若瓜徳死して後、二十年に及んで、その二姪、わづか數百フランクにて、路易十八世より、その伯父に賜はりし金の記事扁圓を賣りたる程に困窮せしなり、識者その事を歎じて、立翁士の繁華は全く若瓜徳に賴ることなるに、その親族を存問するものなきは、獨り何ぞやゝと云へり、

凡そ新發明を作したる人にて、上にいへる若瓜徳の如き、一己に得たる利はあらずして、一國の工業に關係し、それをして、大いに繁盛上進せしむるもの、其類多くこれ有り、然れども、我れ今之に繼ぎて、近世にて一人の創造者を擧ぐべし、即ち寒微より起り、許多の難事を忍びて、梳治衣料機器といへるものを造りし若照・亥爾滿なり、

（十五）亥爾滿幷びに梳治衣料機

亥爾滿は、法國にて棉花を製する工場のありしモルハウスの人なり、一千七百九十六年寛政八年に生る、その父、棉花を治むることを業とし、亥爾滿、十五歳の時工場に入り、この業を爲しける其暇を以て、器學に心を用ひたり、その後巴理に往き、その伯父の銀行舖に住しけるが、夜間には算術を學びたり、その親族の中にて、モルハウスに小さき棉花を紡する行店ありしかば、亥爾滿はこの業を習ふため、こゝに移り、同時に百工機器貯藏館法國器械を集めたる所なり の

* Joshua Heilmann.

生徒たることを得て、益〻器學を研究せり、それ棉花は、紡するまでに人工を勞するものなれば、亥爾滿これを紡する迄の備へを爲す機關を造らんとて、これに從事せり、亥爾滿の最初に造りしものは、繡を爲す機器にして、二十の針、同時に運動するものなり、凡そ六箇月にして、これを成就するに至る、一千八百三十四年天保八年展觀場の開きしとき、これを列ね出だしければ、金の匾圓を賞賜せらる、これに繼いで、また種々の機關を造りしが、就中尤も奇巧なるものは、同時に二具の天鵝絨を織る機關なり、然れども、その梳治衣料一機器に至りては、その靈巧遙かにこれに勝りたり、その成就に至るまでの緣起を、次に略述すべし、」亥爾滿は、長き棉花を梳するための機關を考へ出ださんと、數年の間これを勉めたり、世に行はるゝ尋常の梳治機器は、糸に製するまでにこれを治むること能はず、且つ棉花の廢損するもの多かりし故に、紡棉工場にて五千フランクの賞を掲げて、能くこれを改正するものを募りければ、亥爾滿、便ち之を作らんと企て思へり、然りと雖も、亥爾滿、もと利の爲に心を動かすに非ず、諺に曰く、常に利を獲ることの多少を謀るものは、決して大事を成就すること能はず、」亥爾滿は、新器を作ることを欲せり、この梳治機器は、始め想像せしよりは手を下すに難くして、多年の困苦の功を費せり、元來、その妻資產厚きによりて家富みたりしが、これが爲に貧窮に迫り、朋友の救助を仰ぎて、陸續して工夫を下したり、其後、英國に赴き、滿遮士打に、暫時の間住しけるが、又法國に歸り、常にその機器に精神を注ぎ、百事心に入らざりけり、一夜火爐の側にありて、己れが運命の艱難、並びに一家これが爲に貧苦を受くることを思ひつゝ、その女兒の輩長き髮を梳りて、これを見たりしが、忽ち心に悟るところありて、その機器の難處に勝ち過ぎたり、これより次第に進歩して、梳治衣料一機器を成就するに至れり、忽ちこれを見れば、甚だ難からざるが如くなれども、その實は紛糾錯綜せるものにして、これを造ることの辛苦言辭に盡し難し、之を用ふる人に非ざれば、具さにその巧妙を曉ること能はず、その柔かに動轉して、棉絲の長短を分ち、又これを排列することの明よりして、尋常の棉花を以て微細の糸を紡することを得たりしかば、貿易に於て大いなる利となれり、蓋し工人、棉花を以て高價の衣料に用ひ、且つ少しの棉花より多分の細絲を造

り出だせり、僅か一斤の棉花にて、細絲に紡すれば、三百三十四里の長さあり、棉花にて價わづか一時令のものを、上等のレイスに作れば、三百封度の價に上れり、製造出賣の利、凡そ六千倍以上の多きを致せり、

亥爾滿の機器、一たび世に出でたれば、忽ち英國の紡工その有用を重んじ、蘭加舍の鉅農六家、三萬封度にてこれを用ふる免しを買ひ、獸毛を紡する工場にて、また三萬封度にて、ウを獸毛を梳することに用ふるための免しを買ひ、禮圖のマルシャル、廁を刷することに用ふるために、二萬封度にて免しを買ひたり、凡そ亥爾滿の如き人、その生平の精力を竭くすによりて、世の開化昌盛、驚くべきほどに進みけるなり、

改正　西國立志編第二編　終

改正　西國立志編　原名　自助論

第三編　陶工三大家、即ち巴律西、薄查、空地烏德

拉斯金曰く、忍耐は、剛德の中に在りて、最も美にして、且つ貴く且つ稀れなるものなり、忍耐は、諸々の快樂の根本にして、又諸々の權勢の根本なり、人、將來の期望は、忍耐に由りて得らるべし、故に久しきに耐へざるものは、その期望するところのものを失ふことなり、

陶工に驚くべき忍耐の德を著はせるものあり。就中、法國の人巴律西、日耳曼の人薄查、英國の人空地烏德を、今こゝに撰べり。

（一）福楞察の人拉加、その業を勉むる事

往昔、義的拉士岡の人、陶器を作ることを知れり。然るに中ごろ、その術世に絕えたりしが、

フロレンス福楞察の雕像工に、拉加・垤拉・羅備と云るもの、再びこの術を發明せり、拉加は勞苦して倦まざる人なり、晝間は鑿を以て工事を勉め、夜は繪畫を學びたり、木花を籃に入れ、深更には足を其中に入れて凍寒を防ぎしとなり、伐薩律、これを評して曰く、拉加かくの如く勉強なることは怪しむに足らず、何にとなれば、何にの藝術に拘らず、寒暑飢渴、その他不快の事に耐ゆるの力あらざるものは、決して卓犖の名を成すこと能はず、されば、その身を安逸にし、世間の樂しみを受けながら、その技藝の衆に超えんことを欲するは、大なる誤りなり、蓋し、技藝は睡眠に出りて得らるべからず、必ら常に警醒し、察視し、勞苦するに由りて、進益の功を得べくして、大名も亦これに隨ふことなり。

（二）*拉那德・巴律西

*Bernard Palissy.

拉加、或る時、心に思ふには、大理石、價ひ貴きが故に、土を燒きて摸型を作りなば、大いに財費を省くべしと、これよりして屢々試驗の功を積みけるが、後つひに藥物を以て土器を燒き、光澤を發し、又これに彩色を加ふるの術を悟れり、

*Luca Della Robbia.

巴律西は、一千五百十年、永正七年法國に生る、その父母甚はだ貧しかりし故、鄉校の教へを受けたることなし、設因的土に住し、玻璃に畫くことを業となし、また地を測量することを以て過活を爲しけるが、妻子ありてより後、これ等にては口を糊するに足らざりけり、この時、法國の磁器、粗醜にして、栗色なりければ、巴律西、因りて上好の陶器を造り出ださんと思ひ立ちしが、一日、意太利の名工垤刺の製する美麗なる磁盃を觀しかば、その心益々これに傾むきけり、「もし巴律西をして、單獨ならしめば、必ず以太利に旅行し、その祕傳を探るべきに、妻子に羈せられたる身なれば、その事もなしがたく、暗中に摸索し懸空に思想して、五色を燒き傳くる藥、幷びに白色を發する藥を看出だして、精好の陶器を作るべしと、日夜この事をぞ務めたりける。

巴律西、己れの意を以て藥材を聚め、碎きて粉末となし、又土器を買ひ藥を塗りて、竈の中に燒きけるが、その經試中らずして、徒らに薪柴、藥物、時日、工夫を費すのみなり、然れども、巴律西は、この祕密を看出ださざる中は、決して中止せずと、志を定めたり、始めて作れる竈は、善からざりければ、又改めて戶外に作り、この竈に於て、幾回となく許多の

薪を燒き、許多の土器を費して、貧困に迫り妻子を養ふことも得ざるに至れり、これに由りて、時に玻璃に畫き、土地を測量し金錢を得たりしが、忽ちに又これを經驗に費し盡す、かくの如きこと屢〻なり、その後、薪柴の價貴くして、已れの家にてこれを買ふこと能はざりしゆゑ、或は近所の燒塼窯に於て、或は玻璃窯に於て、多年の間、屢々試驗を爲したりしが、更に尺寸の功も見えざりけり。

巴律西、一の大試驗を爲さんと思ひ、三百餘の土器を買ひ、藥料を塗り、玻璃窯に入れて、これを燒くこと、四時ばかりにして、出だし視れば、三百の中にて、藥の燒き付きたるもの一箇あり、熱さ退ぞき硬くなるに及んで、次第に白色となりたり、抑もこれまで他色の燒き付きたるものもありしが、白色はこの時始めての事なれば、巴律西、大いに喜び、走り歸りて、これをその妻に示す、然れども、これ特に其端緒の微しく露はるゝのみにして、これより後、その試驗また屢々功なかりけり、

巴律西、成就の期に近かるべしと思ふにより、運び、〇〇自ら窯造の事を爲しける故、七八箇月を費しけり、その竈既に用ふべかりければ、自〇ら埴土を以て許多の土器を作り、藥料を塗りてこれを竈中に入れて、火を著けたり、一晝夜の間、竈邊に坐して、薪柴を加へたりしが、藥料未だ燒き附かずして、旭日の光り、その顏を照すに至れり、時にその妻少許の朝食を持ち來り、巴律西に與へけり、これその暫時も竈を離れずして、看候するが故なり、〇〇〇〇第二日過ぎたれども、未だ燒き附かずして、夕日西に沈み、その夜もまた空しく過ぎぬ、巴律西、蓬頭垢面、その色土の如く、身體枯瘦したれども、これを事ともせず、竈傍に在りて、看守して去らず、〇〇〇〇第三日晝夜又過ぎて、第四日第五日第六日と相續き、第七日の曉に至るまで、薪を加へけるが、藥料終に燒き附かざりけり、巴律西、こゝに於て以爲へらく、これ必ず藥料の未だ當らざるものあるなりと、其後二七日或は三七日の間、新藥を調和し、擣煉しけるが、土器を買ふべき錢財なし、幸ひに一友より借りて、新試驗の具備はりければ、やがて火を焚き始めたり、熱氣熾んになりけれども、藥料未だ燒き附かずして、薪柴已に乏しくなりたり、いかにしてか、火力を減ぜざらしめんと、案じ思ふに、園に木牆のありければ、之を引き抜きて竈中に投ぜしが、藥料未だ鎔銷せざりけり、巴律西、なほ十ミニユートの間、火力を蓄えなば、經驗成るべくや、と思ひければ、

何ほど貴きものなりとも薪に用ひなんと、遂に家にあるところの椅子を壞りこれを火中に投じたり。然れども火候なほ未だ到らず、殘れるものは庋架のみなりけるが、これまた裂きて竈底に抛ちたり、その妻子は、巴律西狂病を發したりと號び逃げ走りしが、この最後の火力に由りて、藥料始めて燒き附きたり、尋常栗色の缸瓦なりしが、竈より出して冷かなるに及び、變じて自色となりて光澤を發せり、是れその經驗の始めて成就せるものなり、巴律西、次に工人を傭ひ、土器を造らしめ、自らは黏土を以て古錢の形を模造し、その査出する藥料を燒き附けんと欲せり、然れども、窮貧既に迫り、妻子の養ひも爲し難く、且つその陶器の發賣に至ることは、旦夕の事ならねば、大いに憂悶せしが、幸ひに酒家主人ありて、その志を嘉し、その家に寄食せんことを許しければ、巴律西、每日窯處に往き、その業を修めけり、その後自ら工夫を出だし、竈を建てけるが、その內面を、フリント〔火石〕を以て造りたれば、火盛んなるに及んで、火石破裂し、その碎片、土器に黏著せり、ゆゑに藥料燒き附きて、光色を發すと雖も、賣品となすに足らず、六箇月餘の功勞、また空しくなりたり、巴律西、この時の事を自ら言つて曰く、かくの如く、功勞屢々敗れたれども、余の志望は決して失はず、余種々の艱難を受けしが、就中最も堪へがたきは、家人の詬罵なりけり、蓋し妻子の輩、事を解せざるゆゑ、余の功勞を爲すことを欲せずして、その成就を望めり、吾が窯の上に蔽ふものなかりければ、火候を看守するにあたりて、風雨に暴されて終夜を過ごす、人の憐み助くるものあらずして、獨り猫嗥狗吠の予に伴ふものあるのみ、或は猛風甚雨により、已むことを得ずして、戶中に逃れ入りしことあり、或は中夜暫らく眠らんと欲して屋中に入るに、衣は雨に濡ひ泥に塗れ、醉人の如く、葡萄して僅かに能く行くことを得たり、蓋し久しく勞苦して功なきを以て、愁憂困憊したること、かくの如くなりしなり、然るに悲いかな、我れの居室、また吾れを庇庥するところにあらず、室中に我れを苦惱せしむるもの妻子の詬罵を言ふありて、猛風甚雨より甚し、かゝる許多の憂苦に堪へて、しかも吾が身の死せざりしは、自ら不思議なることと怪しむほどなり、と云ひけり、

巴律西、この時大いに失望し、愁悶特に深く、一日悄然として野外に步しけるが、その衣は爛布の如く、自らその身を顧れば、徒らに痩骨を餘せり、髀肉盡く脫して、襤褸を著くること能はざるに至れり、妻子は常にその失計を咎め、鄰人はその頑愚なるを笑ふ、されば、一

時舊業に復り、家口を養給し、一年の後、體面あることを得たりければ、また陶器を製することに從事したり、既に十年の星霜を藥料の試驗に費したりけるが、その事十分完全なるに至るまでは、更に又八年を歴たり、蓋し巴律西、次第に經驗を積み、工巧に至り、敗績に由りて進益を得たり、次第に藥料の功能を諳じ、黏土の性質を知り、窯竈の製造を悟れり、始めて手を下してより、十八年にして、始めて自ら陶工と稱し、その器を賣ることを得たり、巴律西、既に上好の陶器を製することを得たりしが、これを以て未だ足れりとせず、また器上に摹するところの圖畫を精妙にせんと欲し、草木鳥獸蟲豸の類を集めて、生ながらにその眞形を寫し、大いに工夫を費せり、故に巴律西の賣れる磁碟缸瓮、その圖、精巧にして風韻あり、今世に至り、その價の貴きこと驚くべし、前年倫敦に於て、巴律西の造れる小碟、徑一尺二寸、中央に一の蜥蜴を畫けるもの、賣品に出でけるが、その價百六十二封度　凡そ我邦六百兩餘なりしなり、

巴律西、既に名工と稱せらるゝ後、甚だしき未だ今世の如き開化に進まず、國君往々法教の事に關係し、人民の良心を強ふることの風俗、猶ほ未だ已まざりけり、巴律西は、新教（プロテスタント）を信ずるの人にして、且つ公然として己れの說を主張せるが故に、生平巴律西を惡みしものに訴へられ、遂に囹圄に下され、焚殺せらるべきに定まりしが、故ありて赦されたり、その後、陶器を製する方を世人に示さんが爲に、種々の書を著し、また星卜の術を駁し、丹竈の法を排斥し、妖術及び假冒の事を毀りければ、仇敵益〻多く生じ、再び異端の名を得て、バスタイルの獄に囚る、この時に、巴律西、年七十八、死期に迫ると雖も、その剛勇は、少しも衰へず、その新教を固執すること、藥料を試驗せし時の如く、堅忍にして屈沮せざりけり、法國の王顯理第三、自ら獄に往き、巴律西を說諭して曰く、汝は吾が母及び予に事へたること四十五年の久しきを經たり、然るに汝、新教を固執するの故に、予今人民に逼られ、汝を汝の敵人の手に渡さゞることを得ず、汝も し教派を改めずんば、明日火に焚かるべきなりと、その改化せんことを勸めければ、巴律西答へて、「僕固より生命を以て造物主に獻ぜんと志せり、大王屢〻僕を憐むといふことを宣へども、僕は却て大王を憐むものなり、何にとなれば、『予今人民に逼らるゝ』と宣ふこと、王者の語に似るべくもあらず、僕匹夫と雖も、死すべき所以の道を知りたれば、大王及び人

民等に逼らるゝことなし、」と、強くも言ひしが、果してその後幾何もなく、安然として獄中に死したりけり、その非常の忍耐、非常の剛烈なること、眞正の大丈夫と稱するに堪へたり、

（三）※薄査の事

堅質の陶器を創製せし約翰・弗列德力・薄査は、大いに巴律西の行狀と異なり、然れども、その小說に似たる談話あることは、これに似たり、薄査は、一千六百八十五年二年ホイトラ日耳曼ンドの郡名に生る、十二歲の時に、伯林の製煉藥家の弟子となりけるが、甚だ製煉術を好み、暇あれば經驗を爲すことを務めたり、就中、尋常の金類を化して黃金と爲さんと欲し、これに心を注ぎしが、數年の後、自ら煉金術を看出だせりと詐り、その師の前に於て、手訣を爲してこれを欺きければ、その師及び他人これを信じ、薄査は、實に銅を化して黃金と爲せりとぞ言ひける、」この新聞、遠近に達しければ、大衆競ひて煉金舖の前に集まり、金煉術を發明する少年の面を見んと欲す、普魯社の王佛列德力第一世、自ら薄査を見て、これと語らんと欲するに及んで、薄査、銅よりして化したる黃金なりとて、これを獻じたり、普魯社、こ

*J. F. Bottgher.

の時、金幣に乏しかりければ、王これを見て大いに喜び、薄査を用ひ、スパンドーの堅城に於て、金を煉らしめんと欲せり、然れども、薄査は王の志を疑ひ、且つその詐りの露顯せんことを恐れ、逃れ奔りて塞楯の境に達し、維丁堡に至りしに、塞楯の君圭、即ち波蘭の王と爭する弗列德力、また薄査の助けによりて、許多の金を得んと欲し、大いに喜んで、竊かにこれを埜列士田に送り、慇懃に待遇したりしが、護衞を置きてその逃脫を防ぎけり、この時、波蘭に叛亂の事ありければ、弗列德力、已むことを得ずして、薄査に別れ、波蘭に赴むきけり、然れども、金を得んと欲する心、甚だ切なれば、ワールソー波蘭の都より書を寄せて、薄査にその祕方を傳へんことを逼りければ、薄査、一小罎の赤水を貯ふるものを王に贈り、これ即ち銷溶せる諸金を黃金に變ぜしむるものなり、とぞ云ひやりける、王と太子と親ら密房に入り銷鑰を施し、鍋の中に於て、銅を溶和して後、薄査の赤水を和したりしかども、化して金とならざりけり、こゝに於て、王なほも薄査の方書を檢視するに、この赤水は、極純潔の心を以て用ひざれば、効能あらずとぞありける、王自らその夕べに當り、その身虔潔ならぬことのありしを覺えて、試驗の成らざるはこの故なりと思へり、然るに第二の試驗、

また成らざりければ、王甚だ氣色を損ず。何にとなれば、これを始むる前に於て、罪を懺悔し、心身を潔淨にして、これを行ひたればなり、弗列德力・彝額士丟士、つひに薄查を強ひて、煉金術の祕を顯はさしめ、これを以て財用必需の急を救はんと欲せり、故に薄查懼れて逃れ出でけるが、遂にまた捕へられて、もし金を造らざれば、縊刑に處すべしと、王より嚴しく命せられたり、その後一年を過ぐれども、金を作ること能はざりしが、王これを刑に行はずして、遙かにこれに過ぎたる發明を爲さしめんと欲し、その命を宥し置きけり、即ち黏土を化して磁器と爲せる術なり、蓋しこの時、葡萄牙の人、支那より磁器を齎し來りて、これを賣るものありけるが、その價これに均しき重の黃金を以て換へたり、薄查、こゝに於て、磁器を造り出ださんと、終日終夜、工夫を用ひしが、久しきを經るまで効驗なし、一日、偶偶金類を鎔するための堝を製する赤土を持ち來れるものあり、薄查おもへらく、この土は燒けて極熱に至るときは、玻瓈の如くになりて、その形を長く保てり、たとひその色暗くして磁器に異なりと雖も、その原質は相似たれば、この土をもつて試驗せばやと、果して偶然にこれに由りて、赤色磁を造り出し、賣品とするに至れり、然れども薄查おもへらく、眞正

の磁器は、白色より成り立つことなれば、白色の磁器を製する祕事を發せんものをと、多年の間經驗を積むと雖も、つひに功効なかりしが、また偶然の事より査出せり、一日薄查白らその假髮常よりも重きことを覺えたれば、その假髮の中に、これを整理する爲に用ゆる白粉あるに由る、即ち一種の土なりと答ふ、薄查直ちにおもへらく、この白土もしくは己れの査出せんと欲する土にはあらずやと、これを以て經驗せしかば、その白粉の中にケイオリンと云る分子を含めり、この一物の缺けに由りて、實に多年困苦して成就する能はざりしことを發明し、つひにこれを得て、一朝に功を奏したり、一千七百零七年、寶永四年始めて白色の磁器を製し出し、之を王に獻ぜしかば、王大いに喜び、益〻十分に完成ならしむる爲め、必用の具を薄查に與へたり、薄查こゝに於て、丹竈の事を止めて、偏へに磁器を造ることを業とせり、故にその工舖の戶に、一聯の詩をぞ錄したりける。

全能の上帝至大の造化者、
煉金人を化して陶人とせり、

然りと雖ども、佛列德力は、なほも薄査の祕事を他人に傳へんことを恐れ、また己れの羈制を脱せんことを恐るゝにより、晝夜、兵隊を以て守護せしめ、又六人の重臣をして、薄査の擔保たらしめ、彼れもし逃逸せば、汝等皆な罪を受くべしと命じたり、去る程に、薄査の造る磁器、ます〳〵精良を究め、重價を以てこれを賣ることを得たり、王こゝに於て、大工場を建て、工錢を厚くし、歐羅巴各國の工人を招き、支那日本製に愈れる磁器を盛んに四方に發賣しければ、財貨多く塞楯に聚まり、王及び人民の利潤となれること少からず、瑞典より攻め襲はれし疲弊も、これによりて、稍々回復したりけり、されば、その功勞によりて、ベーロン第五等の爵なり、支那男爵の如し　の爵に陞れり、然れども、その身は舊に仍りて囚人の如くに待せられ、工事を畢る後は、夜間その臥房に外より銷鑰を施されけり、薄査少しく寛免を得んと欲し、屢〻王に書を贈りけるが、その中に甚だ憐むべきものあり、「予、磁器を造るに於て、全副の精神を惜まざるべし、予、前古の創造者の爲るところより、多く爲すことを憚らざるべし、特に願はくば、予にリベルテイ、リベルテイ自由の事を與へ玉へ、」と言ひたり、王は金錢を與へ恩渥を施せども、獨りその身をして自由ならしむることを許さず、薄査はこ

れに由りて、塵世を厭ひ、己れの身をも愛せずして、始めて酒を飲むを以て事と爲たり、夫れ感化の速かなること影響の如し、薄査この惡行を始めたるとひとしく、工人大半は皆な醉漢となり、互ひに爭鬪して己む時なければ、兵隊を置きその亂を鎭むるに至れり、暫時の間に工人三百名、酒に因りて罪を犯すもの囚人となる、一千七百十九年、享保三年薄査久病の後世を辭しけり、時に年三十五、夜中に塚地に葬らる、恰も犬を遇するが如し、嗚呼、塞楯の大恩人、かくの如く不幸にして、一生を過ごせるは、豈に憐むべきの事ならずや、

（四）若社・宕地烏德

※Josiah Wedgwood.

英國の陶工宕地烏德は、上の二人に比すれば、良時に生れて福分ありけり、一千七百五十年前後、寶曆明和の比英國工業の事、歐洲上等の各邦に及ばす、斯答福德舍に陶工ありて多く住せし

が、黏土の乾かざる内に、模範を著くるものにして、その色暗く、その製粗醜なりければ、上等の磁器は和蘭の埴爾弗的より、輸入しけり、*Mr. Gladstone.

額氏、當今英國相臣、長於政學、有著述才、文化六年生、

一千七百三十年、享保十五年、ボアス培斯連舍の邑に生る、その父は陶工にして、子十三人ありける、その最後の子なり、父死して後、その兄に從つて、家業を始めしは、僅かに九歲の時なり、幾何もなく痘瘡を患ひ、これに繼いで右膝に疾を得て、時々發作しければ、多年の後右足を割斷して、始めて治したり、

額拉德斯敦、近時培斯連に於て說諭せることのありしとき、窓地烏德の事を稱譽し、その後來名工となりしは、この病を受けたる故に由ると云へり、その言に曰く、この病は窓氏をして輕快康強の工人となること能はざらしむ、然れども、窓氏をして肢體の用より大なるものに注意せしめたり、この病は窓氏をして心を內に用ひしめ、この術の律法祕奧を究察せんと企意せしめたり、この病は窓氏をしてその成就するところ、往古雅典の陶工と雖も、これに及ぶこと能はざるに至らしめたり、グラッドストン、この說ありしは、一千八百六十三年第八月、即ち文久三年なり、窓氏、種々の陶器を造り、生計を營みけるが、この時、英國に於て、未だ上好白色の磁器を製するの法を知らざりければ、これを發明せんと欲し、土を究察し、その光色銷鎔の性能を諳ぜんが爲に、屢〻試驗を積みたり、久しうして後、一種の黑土にて、燒けて白色に化するものを查出し、これより又考思を經て、玻瓈の如く光亮純白なる陶器を製し出だせり、即ち今イングリシ、エルセンウエール〔英國陶器〕の稱を得て、互市場に於て、貴重の貨物となせるものなり、窓氏の生れし時、英國にて、上好の磁器は、盡く他邦より買ひ入れたるに、窓氏の功に由りて、英國の磁器、獨り自國の用に供するのみならず、他邦に輸出するもの、許多の數に至れり、一千七百八十五年、天明五年製磁工場に於て、厚値を以て、二萬の工人を役使するに至れり、然れども、窓氏「この工場は、なほ嬰兒なり、英國近來政法風俗の上進せしに比すれば、この工場未だ盛んなりとするに足らず、」と云ひけるが、果してその言の如く、この工場次第に蕃盛し、一千八百五十一年、嘉永五年英國より他邦に輸出するところの磁器、八億五百萬の大數に及べり、その他、國中にて消費するものは、此の數にあらず、抑も工場の盛なるに隨ひ、人民の情形も、これに由りて上進することなり、窓氏、その業を始むる時に當りて、斯答福德舍の地は、半ば開化せる情勢に

して、人民貧しくして戸口少かりしが、空氏の工場、その基礎を固うするに及んで、人民これを以て衣食するもの日に多くして、戸口舊に三倍せり、しかしてその器物の精良なるに隨ひ、人心風俗もまた徳善の道に進みたりけり、

空氏の如き人は、文明世界の工事の英雄とすべし、蓋しその艱難を忍び、試驗を積める剛毅の志行、彼の海陸軍人の勇氣を奮ひ、生命を致すものに減ぜざるべし、三軍の英雄は、邦國の爲に工事の英雄の成就するところのものを保護するものなり、

改正

西國立志編第三編終

眞正學士。不レ恥レ爲二賤業一。恥レ之者。非二眞正一。學士二。眞正文人。不レ嫌レ爲二俗務一。嫌レ之者。非二眞正一。文人一。昔者。趙岐賣レ餅于北海市中。沈麟士織レ簾讀レ書。手口不レ輟。天下後世。不二啻不一レ賤レ之。而反更重レ之。程明道僉二書鎭南判官一。筦庫細務。無レ不レ盡レ心。屢平二反重獄一。蘇子瞻僉二書鳳翔府官一。意二其文人一。不下以二吏事一責上レ之。子瞻盡レ心其職。老吏畏伏。二公之賢。於レ是滋見焉。今之讀レ書者。或恥以賤業治レ生。又不レ屑レ爲二俗務一。及レ不レ得レ已。而賣レ履販レ繒。或折二腰五斗一。則一分束レ書不レ觀。曰。我無レ暇矣。嗚呼。人病レ無レ志耳。果有レ志矣。不レ病レ乎無

レ暇也。試思。ヘ子瞻在ニ鳳翔一。何等繁劇。而是時所レ作。如ニ鳳翔八觀一詩。鍛錬敲推。亦何其綽綽有ニ餘暇一也。且學問之功。貴ニ乎循レ序漸進。經レ久不レ輟。故一日不ニ必要一多時一也。嘗有ニ一官一。謂ニ某先生一曰。予職務鞅掌。患ニ讀書少レ暇。對曰。君讀レ書如ニ走レ馬看レ燈。雖レ毎日二六時中。一意從事。積至於十年。不レ能レ成レ業也。其人怫然。先生曰。君毎日只要ニ讀レ書三枚一。深思牢記。十年之後。必博識超ニ衆矣。旨哉言乎。如ニ茲編所一レ載。德一留一斯一格一的。一爲ニ理學一名家。而以レ造レ鞋爲ニ本業一。一爲ニ詩文一鉅匠。而畢生不レ廢ニ吏務一。大有レ足レ砥ニ礪後人之志行一者焉。予深望ニ讀者之反覆致レ思也。庚午仲夏二十六日。中村正直題ニ於無所爭齋一。

改正 西國立志編 原名 自助論

第四編 勤勉して心を用ふること、及び恒久に耐へて業を作すことを論ず

アヴイナント氏の詩に曰く、光陰は造化の元金なり、故に能く光陰を用ふるものは、必ず富を致すなり、天上の星も、地上の沙も、勉強して已まざれば、盡く聚め得らるゝことなり、

（一）大功業は、平常なる工夫に由りて得らるべし

絶大の事業を成すには、奇術妙法あるにあらず、また大才睿智を要せず、平常なる工夫に由りて得らるべく、又平凡なる資質の人にて爲し得らるゝことなり、」何にとなれば、善く心を用ふれば、目前通常の事、みな善き經驗となり、これよりして、大いに開悟發明の益を得ることあるものなり、また敗績を取りたることは、眞成の勉強の人の爲には、勇猛精進の力を

發出し、自ら其身を脩むる所以の具となることなり、人の平安に日を度ることは、歩々實地を踏みて、善く適當して事を行ふに由りてへ、及び極めて能く眞正の志氣あるものは、極大の功績を奏するなり、

（二）福運は勤勉の人に隨ふ、幷びに英才の說

福運は盲人の如くにして人を辨ぜずと云ひて、これを咎むるものあれども、決して然らず、福運は實に眼目を具へたり、抑も世人の生涯を觀るときは、福運は常に勤勉なる人の側に傍ふこと、恰も順風穩波の航海に巧みなるものに隨ふが如し、人の學問を爲すに、たとひ高尚なる學科と雖も、凡庸の才質をもつて、心を用ひ功を積み、久しきに耐ふれば、必ず成就の地位に到るべし、たとひ、卓越の才ある人と雖も、心を用ひず功を積まず、久しきに耐へざれば、一事をも成就すること能はず、故に卓越の才は、學問の爲に、必要にあらざることなり、絶大の豪傑と稱せらるゝものと雖も、大率は卓越の才性ある人にあらず、たゞ資質平等なる人の、久しきに耐へて、大業を成就せるものなり、」或る人曰く、英才と云ひて、別に一種の才あるに非ず、常人の憤發切至せるものを英才と云ふなり、」或る有名の學士の說には、英才と云へるものは他なし、勉勵の力の別名なりと曰へり、潤・福士（ジョン・フォスター）他の說に、英才は心火の光りを發する力なり、と云へり、」蒲豐（ビュフォン）は、英才は即ち忍耐なり、と云ひしなり、

（三）※牛董、×客不列爾、自らその學問を爲せし工夫を語る

牛董（ニウトン）の樹菓の墜つるを見て、地に吸引の力あることを悟り、これに由りて日月星運行の理を悟れる曠代の學者なるが、或る人嘗て「何等の工夫に由りて、かくの如き大發明を得玉ひしや、」と問ひければ、牛董答へて「常々にこの事を思ひしに由りて得たりしなり、」と云ひけり、他日また自らその考察を爲せる工夫を語りて、「予は常にこの事を吾れの眼前に存留し、暫くも失ふことなくして、その事の朦朧として微しく明かなることを得るより、次第に少しづゝ開け、遂に圓滿明白なる光りを見るに至るまでを、久しきに耐へてこれを待ちたり、」といへり、これにて、牛董の大名を得たることは、特に勤勉忍耐に由ることを知るべきなり、牛董は、この一課を爲して、意倦むときは、又他の一課を爲し、かくの如く、更換して精神を新た

*Sir Issac Newton.
×Kepler.
牛董、寛永十九年生、享保十二年歿

にし、氣力を養へり、と言ひ傳へたり、」牛董嘗て學士便的禮に語りて、「我れ若し吾が國の爲に何事を爲すとも、吾が當然の分とするところのものは、特に勉強忍耐してその事を思察するのみ、」と云へり。　これに似て、理學者客不列爾、亦學問進益の事を自ら語りて、「予、この事を勤めて思察し、得るところあるが如しと雖も、更に又思察せり、後に至りては、遂に吾が心の全力をこゝに注ぎ、深思熟察したり、」と云ひしとなり、

（四）人の天性、甚だ相遠からず

非常の功績は、特に勉強忍耐に由りて得らるゝことなるが故に、豪傑の士、多く人の天性は大なる差別なし、と云へり、勃爾對文人の説に、大才ある人と通常の人と、その相去ること幾何もなし、と云へり、白加里以太利の理學家の説に、凡そ人誰れに限らず、詩人となり辯士と爲ることを得へし、と云へり、禮諾爾圖英國有名の畫家の説に、人みな畫を學んで成就することを得べく、亦彫像家と爲ることを得べし、と云へり、洛克、英國心靈の理を講ずる大家黑爾白丟士、地垤洛、二人皆な法國の理學家「人の天より受けたる聰明の性、悉皆同等にして優劣なきことなり、故に甲の人の能くするところのものは、その法則程課に從へば、乙の人も亦これを能くし、甲の地位に達すべきなり、」と云ひて、これを信ぜり、

（五）蜂窠の喩、幷びに光陰を黃金に化するの論

製煉家達爾東は、人の己れを稱して、英才衆に超えたり、と云へるを聞く毎に、之を承認せずして曰く、予はたゞ勤勉と積累とに由りて、吾れの業を成就したりと、潤・翰他は、自ら己れを評して曰く、吾れの心は蜂窠に似たり、甚だ嘈騷混亂するが如しと雖も、然るに實は整然として秩序ありて、それが中に造化の生ずる精好の食物を貯へたり、これ皆な勉強して已まざるにより聚め得たるなりと、

凡そ理學者、創造者、工藝の家を論ぜず、その尤も卓越なる人は、皆なその功績を勤勉學習の事に歸せり、蓋し勤勉の人は、萬物を化して黃金と爲すの手段あり、と云ふべし、光陰と雖も、亦これを黃金に化せり、勉強して光陰を造れば、光陰化して黃金となると、云ふ、是の故に、即ち本卷の首「アビナント」の詩の意なり、大名を以て一世を傾動するものを觀るに、大抵は中等の性質を以て勤勉學問し、恆久に耐へ

*Sir R. Peel.　©Who goes slowly goes long and goes far.

て倦まざるの人にして、天資聰穎なるものは甚だ少きことなり、嘗て寡婦あり、常にその子の英靈俊邁にして浮躁輕剽なるを見て、「嗚呼、彼れ忍耐の天性あらず、」と云ひて歎じけるとなり、その忍耐の心なくして輕躁の性あるものは、何事を爲しても人に及ぶこと能はず、たとひ愚鈍の人と雖も、また必ずこれに後るゝことなり、故に以太利人の諺に、「徐々として行歩するものは、久しけれども疲れずして、遠きに行くことを得べし、」と云へり、©

（六）熟復の益、幷びに*比爾*語記を習ふ事

善く工夫を做して、習慣して性を成すことは、凡そ學業を爲すに大なる切要の事なり、これを得たるの後は、その爲すところの業、大いに易きことを覺ゆべし、」蓋し何事に限らず、反復して又反復すべし、書を誦せんと欲するが如きは、幾遍となく熟復すべし、しかるときは、始めは甚だ難しと雖も、然れども、勞苦を爲せるに隨ひ、自然に慣習となりて、次第に容易になることなり、是の故に、反復熟習せざれば、至りて易き技藝と雖も、成就すべからず、反復熟習するときは、至りて難き學業と雖も、成就せらるべきなり、羅伯・比爾は、その材質、中人に過ぎずと雖も、英國議院の辯論家の魁首となれり、これ幼童の時より教を受け、反復習熟せしに由れり、比爾、童子たりし時、その父それをして口に順ひて說話することを習はしめ、又安息日の說法を、記憶せらるゝ程づゝ暗誦せしめたり、始めはその進歩も見えざりしが、久しく已まざりければ、その心を用ふること慣習となりて、記憶次第に強くなり、後には容易に說法を盡く暗誦しけるとなり、これを以て、比爾の强記にして辯才あることは、その天稟には非ずして、幼時より善く工夫を用ひ、慣習して性を成したることを見るべし、

（七）小伎と雖も、亦忍耐の工夫を要す

小伎と雖も、また忍耐の工夫を要す、それ絃弓を彈ずるが如きは、易かるべきに似たれども、多少の勉力を要することなり、一少年、かつて日亞爾尼に、「幾年の間絃弓を學ばれしや、」と問ひしに、「毎日十二時つゝ學ぶこと二十年なりと答へけり、戲臺にて女子の跳舞を爲すものと雖も、數年學習の後ならでは、場に登ること能はず、」答爾搖尼といへる跳舞を善く

*Time and patience change
the mulberry leaf to satin.

せる女子は、戯臺に出づる演習として、一時の間、その父より嚴課を受けたる後は、常に疲れ極まりて氣絕し、衣を解かれ、海綿を以て身體を拭はれて、再び蘇醒せしと云へり、その登場の時、輕快翻轉の妙を得るは、これに由れることなり、

（八）事業を成すことの祕訣、幷びに桑葉の喩

高上なる學術に至りては、その進歩殊に遲し、絕大の事業は、一次に成し得ること能はず、故に人の一生は路を行くが如し、一歩づゝ進むことを以て足れりとすべし、デメイスターは、「等待することを知るは、事業を成就する第一の祕訣なり、」と云へり、穀を穫らんと欲すれば、必ず先づ種を播き、寧耐して久しく待つべし、」最も美なる果實は、その熟すること必ず最も遲し、」東方の國の諺に、「時日と忍耐は、桑葉をして紬緞に變ぜしむ、」と云へり、

（九）快樂の心、一日も無かるべからず

人は固より望みを掛け事を務めて、其成就することを忍耐して待つべし、然れども、常に快樂の心を失ふべからず、蓋し快樂の心は、事を做すに絕好の資本なり、一のビショップ主教の官の論に、「快樂の心は、上帝道に於て、十分の九を占めたり、」といへるが、實にその言の如く、人生の職業に於て、快樂と勤勉との二者、十中の九分を占めたり、」快樂の心を以て、勤勉の功を積めば、その事必ず成就して、福運必ず至るべし、抑も人生の高上なる快樂は、其心公正明白にして、敏快に功程を做すの中にあり、しかして、その他、自ら力を奮ひ、自ら信任する等の好性質は、この快樂に從ひて生ずることなり、西德尼・斯密士、約克のフオストンといへる法官領の住職を命ぜられし時、その心にこれを甘んぜざれども、欣然として往き、力を竭くしてその職を行はんと志したり、斯密士曰く、余自らこの地位を好むことを務め、自ら吾が心を慰和せんことを欲す、もし廢棄抛郤せらるるを以て怨望せば、これ剛腸男子の事にあらず、と云へり、學士呼克、新たに職事を求めんと欲して、李圖を去りしとき言ひける は、余何くの地に住するとも、上帝の福に賴りて、吾れの爲すべきことを爲すべし、もし爲すべきことを看出さざるときは、我れ爲すべきことを作り出だすべしと、〇一世を裨益せんと欲して功勞を爲す人は、就中、久しきに耐へて業程を勉め

加禮、英國人、曆十一年、天保七年歿、*W. Carey.　©Wealth of Nations.

ざるを得ず、何にとなれば、功勞の報、成就の樂は、目前に見えざればなり、蓋し播くところの種子は、嚴冬霜雪の下に埋藏せらるゝことを知ると雖も、然れども、陽春の未だ至らざる前に、農夫は播種の功を竟ることなり、」抑も一世の爲に利益を謀り功勞を甘んずる人、その生時に、その志の成就するを見ることを得ざるものもあり、見ることを得るものもあり、「羅蘭德・希爾は、低價を以て書信を國中に通ずるを得べき規制を創めし人なりしが、生前にその志の行はるゝを見たり、然れども、阿丹・斯密士の如きは、久しく額拉士哥の學校に在りて、「ウエルス　オフ　ネーションス」〔邦國財用論〕を著せしが、七十年の後に及んで、その書始めて菓實を結び、世道民生の利益となることを顯はせり、

（十）望みは品行の本、幷びに加禮

人もし望みを失ひたらんには、天下の物これに償ふべきものなし、蓋し望みを失ふときは、その品行全く壞るゝことなり、傳法教士加禮は、望みの最も深き人にして、最も樂只なる人なり、また最も剛毅にして屈せざる人なり、印度にありて書を著す時、その寫字房に在りて給事する者三人ありしが、一日の中に三人ともに疲勞に堪へざるほどなるに、加禮は少しも倦める色なし、特に課業を易へて精神を休養せるのみ、加禮は鞋工の子なり、この時、木工の子ワアトと云へるもの、又職工の子マーシアムと云へるもの、加禮を扶給し、これと志を合せけるが、この三人の勉勞に賴りて、セラムポールに、一の大なる學院、及び十六所の說法場を建てたり、加禮、十六種の方言を以て經典を譯出せり、嘗て印度に駐劄する總督の許に集會せるとき、一官あり、他人に問ひて、加禮は、昔し鞋工にてありしや否やと云ふ、その聲頗る高かりければ、加禮直に答へて、さにあらず、特に補鞋工のみ、と答へしとなり、〇加禮、童子の時より、難に遇ひて屈沮せざる氣象を顯はせり、一日、木に登りたるに、足を失して地に落ち、その膝を毀り、數十日の間、床に臥せり、然るにその創痊え、始めて步行する時、嚮に落ちたる木に登りしとなり、後來、傳法教士となりて、その剛毅にして恐懼することなき行狀は、この時已にその兆を著せり、

（十一）學士雍*の格言、幷びにその故事

理學家雍の格言に、「凡そ人、他人の既に做し得たることは、必ず做し得べし、」と云へり、故に雍は必ず爲さんと志したることは、たとひ難き事に逢ふと雖も、これが爲に退縮せざりしなり、」雍、始めて馬に乘りし時、同伴せしものは、罷克禮の孫にして、善騎の名を得たるものなり、雍に先ちて馬を馳せ往きけるが、路に當りて高き柵のありけるを跳り越えたり、雍もこれに倣ひ、柵を越えんとして馬より落つ、一語をも言はずして又馬に登り、再び跳り越えんとして又落ちんとせしが、馬の項を緊く持して地に至らず、第三次これを試むるに及んで、高き柵を難なく飛び越えたり、

*Dr. Young. 雍、英國人、文政十二年歿

（十二）畧度棒の事

韃靼王帖木兒、蜘蛛の屢々墜ちて屈せざるを觀て、人の忍耐を以て災禍に勝つべきことを悟れり、これ世人の知るところなり、亞米利加有名の禽學者畧度棒の故事、また大いに人に益あり、畧度棒曰く、予昔し思慮を殫して模寫せる畫を失ひしことあり、今これを語りて、熱好の心及び堅忍の心、能く沮喪せる志氣を挽回することを徵すべし、余嘗て事幹ありて、ヒラデルヒヤに往くべきことありければ、家を出づる前に、畫圖を集めて木箱に入れ、慇懃にこれを一親戚に托し、損害の及ばぬやうに、と命じ置きしが、數月の後家に歸りて、その木箱を開き看れば、こはいかに、鼠その中に居を占めて子を産し、千數に滿ちぬべき禽鳥の畫、悉く齧まれて碎片となれり、これを見て心火上升し、數日の間恍惚として失忘せるもの、如し、既にして我れに回りければ、欣然として舊の如く小銃を手にし、記簿鉛筆を携へて、林樹の間に往き、禽鳥を捕らへ、その形狀を描寫せしが、前時よりは好きことを覺え、三年に至らずして、また木箱に滿つるに至れり、

*T. Caryle.. 加來爾、寛政七年歿

（十三）*加來爾の事

牛董の小犬ダイヤモンド、寫字臺の上にある蠟燭を覆し、その多年勉強して測算せしところの稿紙をして、一朝灰燼に化せしめたり、これに由りて、大いにその體氣を傷り、解悟の力